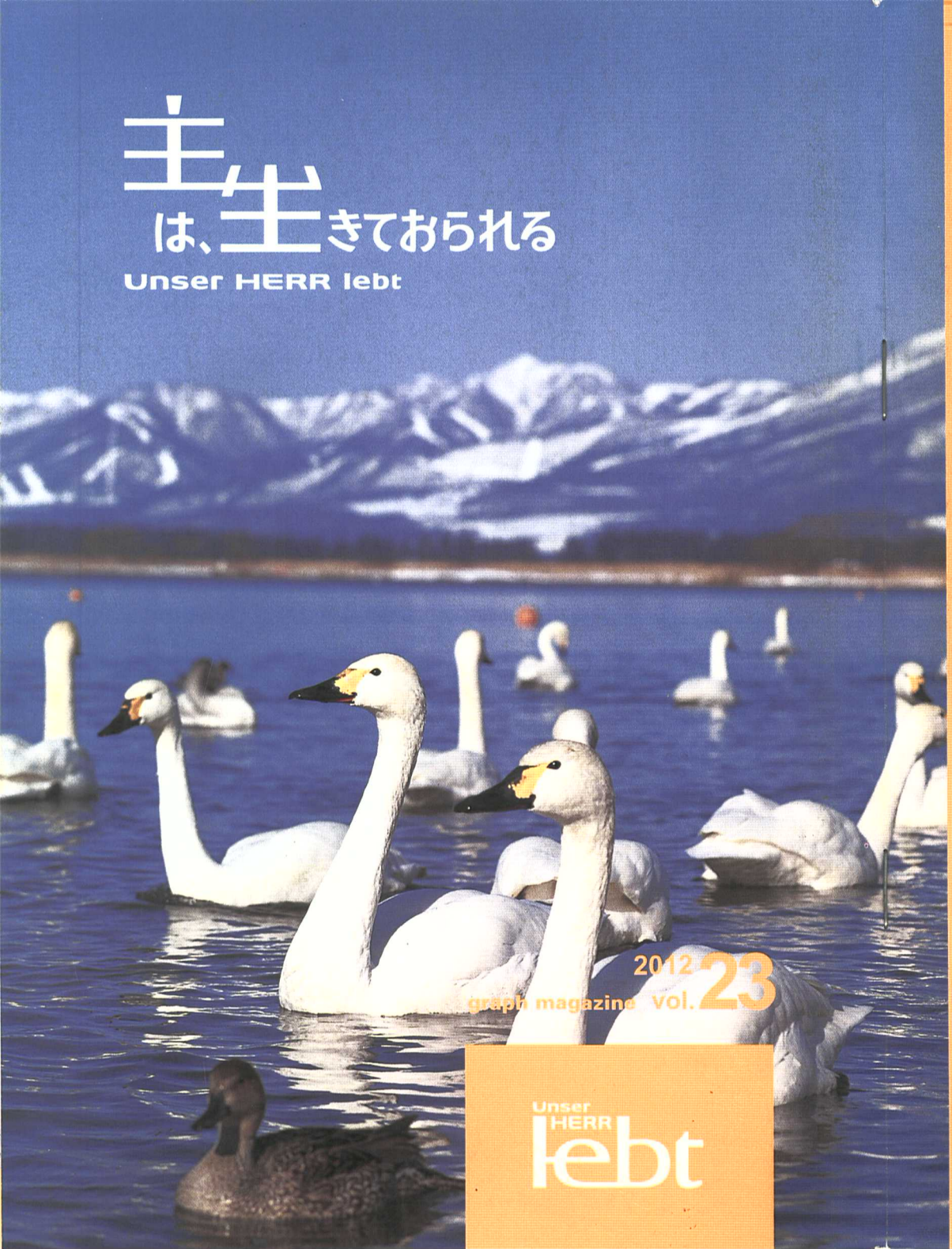
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2012 graph magazine vol.23

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

vol.23 定価100円（本体95円）

メッセージ

4 主イエス様のまなざし　ゴットホルド・ベック

連載第4回

24 神と共に歩む人生　ヴィルヘルム・ブッシュ

6人の証し

42 神は真実な方　古川卓

52 私たちの国籍は天にあります　藤田亜紀

58 測り知れないイエス様の力　黒田麻美子

66 わたしの目には、あなたは高価で尊い　渡辺浩美

76 主の一方的な恵み　松井智恵

86 見よ!主のなさること　増田喜子

94 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物

主イエス様のまなざし

ゴットホルド・ベック

あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を取り囲まれます。わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。あなたがたは、悟りのない馬や騾馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押えなければ、あなたに近づかない。悪者には心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。正しい者たち。主にあって、喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。

（詩篇　32・7～11）

主イエス様を見上げる人は、想像もできなかったほどの喜びを与えられます。

その喜びは、イエス様を見上げる程度に従い、度合いに応じて与えられます。ところが聖書は、救われて神の子とされた後でも救いの喜びを失う可能性があり、とはっきり言っています。信仰が成長しない理由は、主イエス様だけを見上げることをせずに、他人を見たり、悪魔の惑わしに耳を傾けたりするからに他なりません。主イエス様を見上げない人は間違った道に進んでしまうのです。しかし、いつかは必ず回復されると聖書は言っています。冒頭の引用聖句は、回復に導く二つの方法を語っています。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。あなたがたは、悟りのない馬や騾馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押えなければ、あなたに近づかない。

（詩篇　32・8～9）

一つは、主が目を留めてみことばをもってさとす導き方であり、もう一つはくつわや手綱をもって導

く方法です。

主を信ずる人々の中にも、主イエス様の目、そのまなざしによって導かれることのできない人がいます。そのような人に対しては、主はくつわや手綱をもって従わせざるを得ないのです。それはしばしば苦しみや悩みを伴います。自己決定権や自己支配の権利を捨てて、イエス様を見上げて信仰生活を歩む方がどれほど苦痛を伴わない容易なものであるかわかりません。

しかし、くつわや手綱をもって導かれる場合でさえも、主はその兄弟姉妹を捨てるわけではなく、愛しておられるのです。ですから、いかなる状態に置かれても、主を信ずる者は主イエス様の愛を覚えることで喜び、感謝できるようになります。私たちはその見上げる方向によって、喜びに満たされた者になるか、あるいは自ら墓穴を掘る結果となるかのどちらかに分かれてしまいます。

日光の東照宮には「見ざる、言わざる、聞かざる」という有名な三つの猿の彫り物があります。これは、悪いものを見たり、聞いたり、話したりしなければ安全に保たれるという教訓を意味しています。つまり、人間は見たり、聞いたり、話したりすることのない状態に置かれたとき、例えば、盲目で、口がきけず、聾である場合はいろいろなことから守られるというのです。

また聖書は、人間の「見る」という行為から罪が生まれると言っています。

私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を留めよう。（ヨブ　31・1）

しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。（マタイ　5・28）

これらの聖句からもわかるように、私たちが何をどう見るかということが、非常に大切なことなのです。ただ目に見えるものだけに心を奪われて、イエス様を見失ってしまうときが一番危険なときです。聖書から例を見てみましょう。

そのとき、カレブがモーセの前で、民を静めて言った。「私たちはぜひとも、上って行って、そこを占領しよう。必ずそれができるから。」しかし、彼といっしょに上って行った者たちは言った。「私たちはあの民のところに攻め上れない。あの民は私たちより強いから。」彼らは探って来た地について、イスラエル人に悪く言いふらして言った。「私たちが行き巡って探った地は、その住民を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民はみな、背の高い者たちだ。そこで、私たちはネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう。」（民数記　13・30〜33）

カレブと一緒に遣わされた者はイスラエルの人々に、次のように悪く言いふらしました。「私たちには自分がイナゴのように思われ、また彼らにもそう見えたに違いありません」。ところが、そのときヨシュアは次のように言いました。

「主にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。…主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」（民数記14・9）

この聖句からもわかるように、確かに目に見える現実は遣わされた者たちが言った通りだったことでしょう。しかし、彼らは「目に見えない現実」を見失っていました。主を見上げることを完全に忘れてしまっていたのです。残念なことに、多くの信じる

人々がこの遣わされた者のように、モグラのようになってしまっています。つまり、自分のことでがんじがらめになってしまい、主イエス様を見上げることができなくなった状態にあります。

一方、主を見上げる者は、想像しなかったほどの力を体験するのです。パッハは有名なカンタータの中で、イザヤ書40章31節に基づいて「主を見上げる者はあらたなる力を得、鷲のようになる」と言っています。

もし私たちが主を見上げるなら、どのような主のまなざしに出会うことができるでしょうか。次に見てみましょう。



1愛に満ちたイエス様のまなざし

イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかには、だれもありません。戒めはあなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」すると、その人はイエスに言った。「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。

（マルコ　10・17～22）

イエス様は「彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた」とあります。この人は心に飢え渇きをもっていたため、イエス様のみもとに走り寄って、御前にひざまずき、永遠のいのちを受けるために何をしたらよいかと尋ねたのです。彼は豊かな財産にもかかわらず、心は満たされていませんでした。彼は目に見えるこの世のものが移りゆくはかないものであることがわかっていたので、永遠のいのちのことについて尋ねたのです。

人間はすべて、永遠のいのちによってのみ真に満たされるのです。しかし、永遠のいのちを得るためには、自分の滅び行く状態を知って、救いの必要性

現代人の多くは、この金持ちと同じように「私はすべてのことを守っている」と言うのです。結局「私は間違っていない」、「救いは要らない」、「間に合っている」と言います。これは悪魔によってその人々の心の目がくらまされ、自分自身の本当の状態を見ることができずに、そう思い込んでしまっているのです。ところが、これはイエス様を信じる人の場合にもあり得ることです。黙示録の次の個所は、主の救いにあずかっている人について言っています。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

（黙示　3・17）

さて、イエス様はこの金持ちの心の状態と、彼が悪魔によって盲目にされていることとをよく知っておられましたが、決して見捨てることはなさいませんでした。聖書には次のように書かれています。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。

（詩篇　34・18）

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇　51・17）

主は心の打ち砕かれた者をいやし彼らの傷を包む。

（詩篇　147・3）

いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖ととなえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。

（イザヤ　57・15）

神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、

（イザヤ　61・1）

主の御告げ。――わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ。

（イザヤ　66・2後半）

主は、へりくだる者に目を留められます。この人も自分自身の本当の心の状態を知らなかったのですが、イエス様は限りない愛をもって彼を見つめられました。そして、イエス様は彼に向かって「あなたには一番大切なものが欠けている」と言われました。

もしもあなたがわたしに従って来たいならば、持っているものをみな売り払って、わたしの十字架を負ってわたしに従って来なさい、とおっしゃいました。イエス様はこの人を心から愛しておられたのです。「真の深い愛」が、すべてを売り払い、十字架を負って従うことを要求したのです。

この金持ちに向けられたイエス様の深い愛のまなざしは、私たちにも向けられています。イエス様は罪人を救おうとしておられるだけでなく、ご自分に従ってくるようにと招いておられるのです。つまり、罪を赦された者こそ、永遠のいのちを持ち、救われています。イエス様はいつも私たちのことを思い、救われた者に最高の目的を指し示そうとしておられるのです。その意味で、救われたからもう十分だと思っている人がいるならば、それは大きな間違いです。

2イエス様の希望のまなざし

それからイエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

（ルカ　19・1〜10）

イエス様は「ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。』」とあります。

ここで背景となっているエリコという町は、主なる神に呪われた町として知られていました。ここに住むザアカイは取税人のかしらで、金もうけに一所懸命になっていました。おそらく彼は不正な手段を使ってでも財産を増やしてきたことでしょう。しかし彼は、豊かであるにもかかわらず、それに満足していませんでした。どういうわけか彼は、イエス様は自分の満たされない思いを満たしてくださると知って、イエス様を見たい、イエス様に会いたいと思ったのです。それで、背の低いザアカイがいちじく桑の木に登って主を見ようとしたとき、ザアカイを見上げたイエス様の視線とぶつかったのです。ザアカイは、初めて見たイエス様が自分の名前を呼ぶのを聞きました。それと同時に、イエス様が自分に対して関心を持っておられることもわかりました。ザアカイはイエス様のまなざしを見たとき、そこに本当の希望があることを知りました。しかも主イエス様はザアカイの家に泊まるとおっしゃり、ザアカイと共に座し、交わることも決めておられたのです。ザアカイはイエス様を自分の家に受け入れる心の準備ができていましたので、大喜びで迎えました。

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与え

になった。　（ヨハネ　1・12）

これこそ、ザアカイが体験的に知ったことでした。

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。　（1ヨハネ　5・13）

主イエス様の近くにいることは大いなる祝福を意味するということを、ザアカイは知るようになりました。主イエス様に出会った人は決して、闇の中にとどまることはありません。なぜなら、主イエス様は光そのものであられるからです。ザアカイは主に罪を告白せざるを得ませんでした。そして彼は直接、イエス様の口から自分の罪が赦されていることを聞いたのです。このことはザアカイにとって一大転換となりました。それまで彼は自分中心の生き方をし、欲でがんじがらめになっていましたが、今や、イエス様を喜ばせ、イエス様に従って行きたいという願いだけをもつようになったのです。

私たちもイエス様の希望のまなざしを必要としています。将来のことを考えると、人間的には望みがなく、慰めのない状態のように思われるかもしれません。焦ったり、失望したり、落胆したりすることがあるかもしれません。そのときには、主イエス様を見上げてください。そうすれば、ザアカイと同じように、主の希望のまなざしを見ることができます。「イエス様の希望のまなざし」は、私たちが主イエス様と交わりをもつようにと招いておられるのです。イエス様との交わりとは、イエス様が光の中を歩まれたように、私たちもイエス様と共に光の中を歩むことにほかなりません。また、イエス様との交わりとは、いのちそのものである主イエス様のほかには、何も拠り所としないということです。そしてイエス様との交わりとは、ただ主イエス様に喜ばれる者となりたい、という心からの願いです。

3 イエス様の憐れみのまなざし

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大ぜいの人の群れがいっしょに行った。イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい。」と言われた。：そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、「青年よ。あなたに言う、起きなさい。」と言われた。すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。　（ルカ　7・11～15）

この母親は、いろいろな人生の重荷に耐えかね、疲れ果てたかわいそうな婦人でした。以前に、夫を亡くすという悲しみを体験しています。その上、やもめになった婦人のただ一つの喜びであり、また支えであった一人息子にも死なれてしまったのです。イエス様はこの悲しみの婦人を見て深い同情を寄せられました。そして婦人に「泣かなくてもよい」と言われたのです。するとこの婦人は涙ながらに主イエス様の顔を見上げました。そのとき二人の視線が出会ったのです。深い憐みに満ちた主のまなざしに、婦人はそこで出会ったのです。イエス様はこまごましたことや、慰めのことばなどをくどくどおっしゃることはなさいませんでした。死んだ若者に向かって、ただ一言「青年よ。あなたに言う、起きなさい」と言われました。すると死人が起き上がってものを言い始めたのです。

この婦人は、主イエス様の憐みのまなざしに出会

うまでは、打ちのめされ絶望的な状態に置かれていました。一人息子を葬りに出すところで、すべての望みを失った極限状態にいたのです。人間的に見るなら、時すでに遅く、もうどうすることもできないところまで来ていました。けれども、イエス様にとっては遅すぎるということはないのです。私たちにとっては「終わった」と思われる最悪の状態にあっても、イエス様は助けることがおできになるのです。

もしかしたら、あなたの人生も、もう、どうすることもできないところにまで来てしまっているかもしれません。しかし、その状態にあっても、主イエス様にとっては遅すぎることはないのです。私たちの苦しみがどのようなものであろうとも、イエス様の愛のまなざし、憐みのまなざしが、私たちに対して向けられています。私たちがそのまなざしの方に顔を向けさえすれば、必要としている慰めがそこにあります。



4 イエス様の訓戒のまなざし

主イエス様のまなざしは「愛のまなざし」、「希望のまなざし」、「憐みのまなざし」であるだけではなく、誤った人を教え諭し、正しい道に戻す「訓戒のまなざし」でもあります。この「訓戒のまなざし」は、ペテロとの間にひとつの姿を見出すことができます。

主が振り向いてペテロを見つめられた。

（ルカ　22・61）

かつてペテロは、イエス様の前で自信に満ちた態度で次のように断言しました。

ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」

（マタイ　26・33〜35）

そして、イエス様は弟子たちに向かって「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい」（マタイ26・41）と注意されましたが、このときペテロは自信があり、主のことばを真剣には考えませんでした。その後、イエス様が逮捕され、引いて行かれた大祭司の家の中庭で、ペテロは下役どもと一緒に座っていました。彼らはイエス様を信じようとしている人々ではなく、反対にイエス様を捕えた人々でした。ペテロはそのような連中と一緒になって座っていたのです。このときのペテロは、自信に満ちていたときとは打って変わっておくびょう者となり、イエス様を

「知らない」と否んだのです。次の聖書個所にその時の様子が描かれています。

ペテロが外の中庭にすわっていると、女中のひとりが来て言った。「あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。」しかし、ペテロはみなの前でそれを打ち消して、「何を言っているのか、私にはわからない。」と言った。そして、ペテロが入口まで出て行くと、ほかの女中が、彼を見て、そこにいる人々に言った。「この人はナザレ人イエスといっしょでした。」それで、ペテロは、またもそれを打ち消し、誓って、「そんな人は知らない。」と言った。しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる。」と言った。すると彼は、「そんな人は知らない。」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。そこでペテロは、「鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います。」とイエスの言われたあのことばを思い出した。そうして、彼は出て行って、激しく泣いた。

（マタイ　26・69〜75）

自信がありすぎると傲慢になり、心の目がくらまされてしまうのです。その結果ペテロはイエス様の警告を無視してしまいました。みことばの上に立たず、みことばだけを大切にしていないと、やがては悪魔の勝利になってしまいます。自信過剰からみことばを無視すると、やがては未信者との交わりの中で、罪に陥るまであと一歩、というところまで行ってしまうのです。聖書は言っています。

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

（2コリント　6・14）

イエス様は、悪魔の誘惑に陥らないよう目を覚まして祈っていなさい、と警告なさっています。私たちは「自分はもう大丈夫」という自信過剰に陥ると、まもなく悪魔の罠に落ちてしまうのです。これこそペテロの体験でした。人間的に見るならば、この瞬間にペテロはもうだめになっていたのです。けれども、イエス様が祈ってくださっていました。

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

（ルカ　22・31〜32）

イエス様は、悪魔がペテロを試練にあわせることを願って許されたので、ペテロの信仰がなくならないようにペテロのために祈られたのです。ペテロが「そんな人は知らない」と言って三度否んだとき、イエス様は振り向いてペテロをじっと見つめられました。このときの「主イエス様のまなざし」こそ、正しい道から離れた者にその道を指し示す訓戒のまなざしだったのです。この主イエス様のまなざしは、ペテロの心を貫き通し、悔い改めの心を起こさせました。そのとき、ペテロは皆から離れて、一人外に出て激しく泣いたのです。それからの三日間というものは、ペテロにとってすべてが暗闇であり、何も考えることができなかったでしょう。けれども、それで終わりではなかったのです。ペテロは変えられました。主イエス様を否んだおくびょう者のペテロは、死をも恐れない勇気ある主イエス・キリストの証人へと変わったのです。最後に彼は、主イエス様のために殉教の死を遂げたと伝えられています。

私たちも、後のペテロと同じように、自分自身に

より頼むことをしないで常にみことばの上に立ち、妥協したり、未信者といっしょになって調子を合わせたりすることのないよう注意しなければならないのではないでしょうか。

5イエス様の是認のまなざし

最後に、イエス様のまなざしが「是認のまなざし」、つまり「よいと認めてくださるまなざし」であることを見てみましょう。

彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」

イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない。」ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」

ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります。」そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

（ヨハネ　1・45〜51）

ナタナエルの特徴は、真実、純粋、誠実でした。イエス様はこのような人を是認してくださいます。

――今の時代の特徴は、不真実、邪悪、不純などでおよそ正反対です。――しかし、そのようなナタナエルでしたが、主イエス様をただちに信じたわけではなく、はじめは疑っていたのです。メシアがベツレヘムから出ることを確信していた彼は「ナザレから何の良いものが出るだろう」と言いました。しかし、彼はイエス様の出身がナザレであるかベツレヘムであるかということにはこだわらず、直接イエス様に会って確かめてみようと決心しました。ナタナエルは主イエス様と出会って、イエス様が本当に神の子であることを知りました。出会うまでは、ナザレのイエスは神の子であるはずはないと完全に疑っていましたが、出会ったときには、主イエス様が約束された救い主で、神の子であることを百パーセント信じたのです。

このような真実、純粋、誠実な性質は決して生まれつきのものではありません。どんな人間にも、多



かれ少なかれ偽りの気持ちがあるものです。しかし、イエス様はまったく違うお方です。主イエス様との出会いによって欺きや偽りの気持ちが消えてなくなってしまうのです。

正直な心がなければ、本当の望みと祝福とはありません。正直で素直な心をもっている人は天が開かれるのを見る、と主イエス様は約束なさいました。天が開かれるとは、上からの啓示によってイエス様をよりよく知るようになることを意味しています。あらゆる偽り、欺きからの解放は、ただ主イエス様の十字架によってのみ成就されるのです。――ですから、主イエス様は、十字架を受け入れ、それを背負ってご自分に従うことを要求なさったのです。パウロはまさに十字架を負って主イエス様に従う用意のできていた人でした。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ　2・20）と証しをしたのです。――私たちもイエス様と出会って、イエス様のまなざしを見る必要があります。深い「愛に満ちたイエス様のまなざし」は、明らかに十字架について語っています。「イエス様の希望のまなざし」は、ご自身との交わりに入ることを望んでおられます。私たちも主イエス様との交わりに入りたいという強い欲求をもっているでしょうか。そのことについて無関心な人はわざわいです。そして、「憐みに満ちたイエス様のまなざし」は死人をも生き返らせる力をもっています。

さらに、私たちにとってどうしても必要なのは「イエス様の訓戒のまなざし」です。このまなざしだけが、私たちに正しい道を指し示し回復してくださるゆえです。私たちの生活の中には、悔い改めて回復されなければならないことが数多くあるのではないでしょうか。そのことについて、無関心である人は次第に心がかたくなになり、盲目にされてしまうでしょう。最後の「是認してくださるイエス様のまなざし」は、天が開けるのを見ることができるというお約束なのです。

自分自身や他人を見たりすることは、劣等感や卑屈な気持ちをもたらすか、逆に優越感や傲慢な気持ちをもたらしたりするものです。そのような状態にある人は、主によって用いられることが出来ず、むしろ悪魔の道具にされてしまいます。

次のダビデの証しをみると、彼がどうして主のみこころにかなうようになったか、どうして主に用いられるようになったかが明らかです。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。　それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。

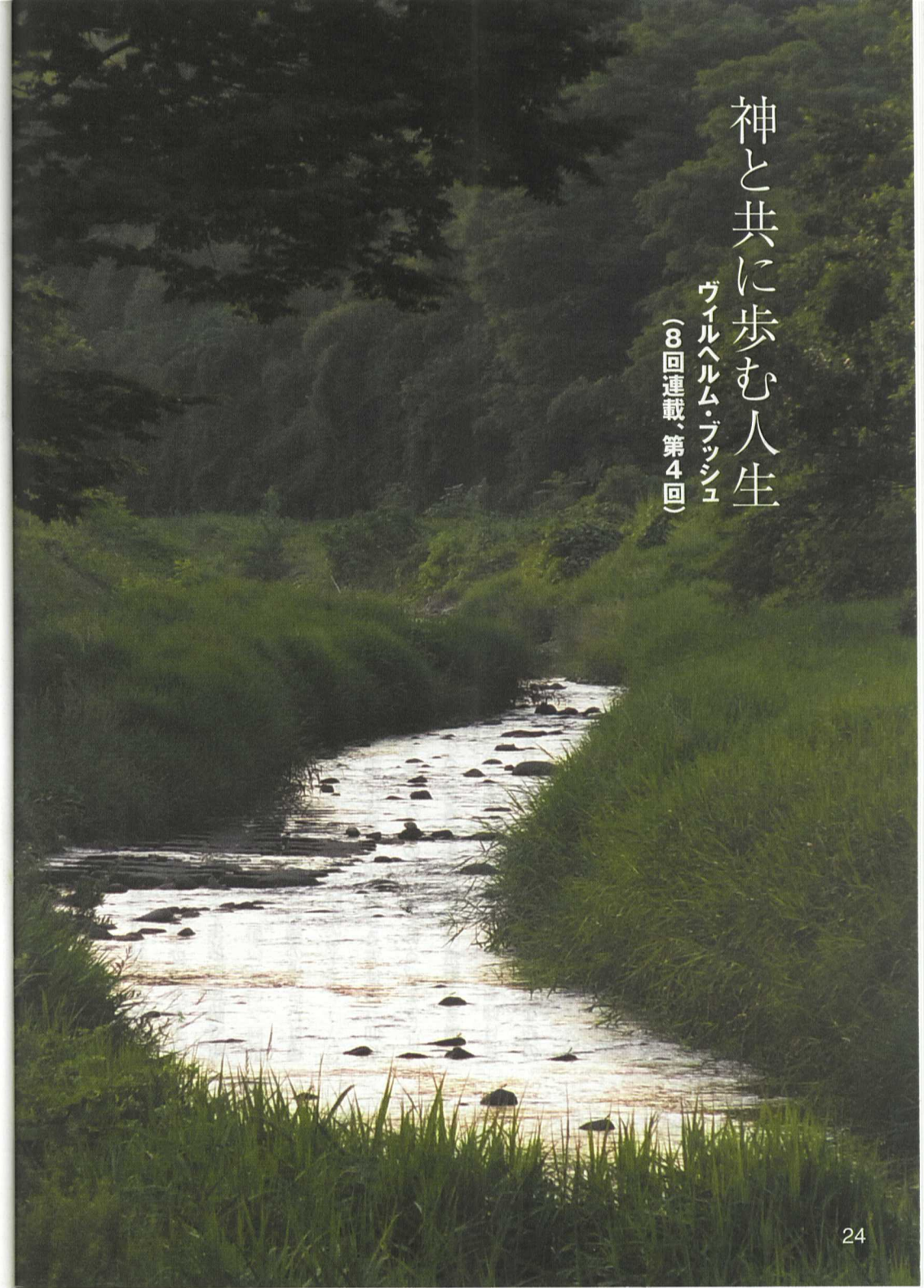
（詩篇　16・8～9）

どのような状況の中にあっても、自分自身を見たり、他人を見たり、周囲を見たりしないで、ただ主イエス様だけを見上げることが勝利の生活の秘訣です。

見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。・・・

あなたを贖う主、イスラエルの聖なる方はこう仰せられる。「わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。あなたがわたしの命令に耳を傾けさえすれば、あなたのしあわせは川のように、あなたの正義は海の波のようになるであろうに。」

（イザヤ　48・10、17～18）



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

（8回連載、第4回）

第四章　「肉の愛」から「神の愛」へ

この章には別の題名をつけることもできます。それは「愛は、罪となりうるか」です。ここで取り上げるのは、現代の私たち皆に関係のある「性的な問題」です。この問題に関して、とても大切で厳しいことをお話ししたいと思います。

限りない苦悩

いまの世相から思わされるのは、現代ほど人間が孤独感にさいなまれている時代はかつてなかった、ということです。職場や町中で見かける緊密な人間関係も、表面的あるいは一時的なものであって、多くの人は「何でも相談できる友人など、自分にはいない」と感じている、それが現実ではないでしょうか。

ある十六歳の少年が私に「僕のそばには誰もいない」と言ったことがあります。「そんな馬鹿なことを。君にはお父さんがいるじゃないか」と言う私に、「ああ親父ね。いつも五時頃帰ってきて僕に文句を言って、飯を食ったらすぐいなくなってしまうんだ」と彼。「お母さんは？」。「母さんはすることがたくさんあり過ぎて、僕のことなんかちっとも構ってくれないよ」。「君の仲間はどうなの？」。「仲間なんかどっちみち、ただの仲間さ。僕には心を開いて話せる人なんか誰もいやしないんだ」。こんなやりとりが続きました。

孤独感を訴えるのはこの十六歳の少年に限りません。たとえ夫がそばにいても死ぬほどの孤独に苦しんでいる妻は多いし、その逆のケースもあります。夫は妻が何を求めているのか知らないし、妻も夫が何を喜ぶのか分かっていません。これが多くの結婚生活と呼ばれているものの実態です。実に多くの人々が孤独の中にいます。

今日、哲学者が孤独について話をすると人々は耳

を傾けます。孤独からの解放を求めている人が多い証拠です。そして孤独から脱出したいという渇望が、最も強い本能の一つである「性的本能」と結びつく時、多くの問題が生じます。十五歳の少年は、孤独から逃れたいばかりにガールフレンドを求めます。妻がいるのに孤独な夫は、孤独から解放されたいと願って秘書と不倫関係を持つようになります。大学で勉強する若い学生も心の中は非常に淋しいので、同じように孤独を感じている女子学生と親しい仲になります。このように、孤独から脱出したいという渇望は性的本能と非常に強く結びつきやすいのです。さらに現代では、人々が性に対して異常な関心を抱くように仕向ける悪らつなビジネスがはびこっています。

ある若い女性は胸を張って言います。「私たちは祖父母の時代とは全く違った道徳感、倫理観を持って生きているのよ」と。しかし私は、長年大都会で牧師をしていた経験上、このようなうわべだけの強がりの裏に、限りない悩みが隠されていることを知っています。危険な関係にある若い男女、偽善的でうわべだけの夫婦、また崩壊に瀕している結婚生活など、多くの方々が悩みの中で苦しんでいるのです。

実は数年前、同じようなテーマで若者を対象に講演会を開いたことがありました。会場に入ったとたん、私は異様な光景に息を呑みました。煙草の煙がもうもうと立ち込め、アルコールのグラスが林立し、多くの若い男たちの膝の上には若い女たちが座っていました。

その中で私は語り始めました。「今の世の中、性に関する痛ましい話がいっぱいあります」。その瞬間、会場は急にシーンと静まり返ったのです。私の言葉を聞いた若者たちの心に、何かが強く響きました。表面的には快楽が支配しているように見えながら、性的な生活に大きな苦悩があることが明らかになったのです。

この苦悩はどこから来るのか

この苦悩は、私たちがもはや善悪の区別ができなくなっていることに端を発しています。ある人々はこう言います。「現代では、私たちは性に関して新しい見方をしているのだ」と。しかし、見方が新しかろうと古かろうと、罪が現実に存在することに変わりはありません。私たちが罪を犯せば良心の呵責を感じます。それが現実です。そして、もはや善悪の区別がつかなくなったところから悩みが始まるのです。つまり、婚前交渉は許されるのか、悪なのか。理解しあえない結婚生活では姦淫は必要悪なのか。同性愛は罪なのか。離婚は悪なのか。一体何が悪で、何が善なのか……。

映画や恋愛小説などでは、性は善悪を判断する対象外の事柄のように取り扱われます。果たしてそれでいいのでしょうか？私たちは善悪の基準をどこに置けばいいのでしょうか？私は青年の頃、性の問題について、一体何が許され、何が許されないのか、散々悩みました。

この問題に正しい答えを出すためには、もう一つの疑問を提示する必要があります。それは善悪の基準を決めるのは一体誰なのか。何が善で何が悪か。正しい答えを出せるのは聖書か、それとも私自身の良心か、という疑問です。

これは大変重要な点です。生きている神がおられるなら、善悪を決めるのは神です。では、もしも神がおられないなら人は好き勝手なことをしてもいいのでしょうか。私たちはここに来て、神がおられるのか、おられないのか、という問題に再び直面します。神が実在するなら、この性的領域に於いても、厳然とした神の考えが必ずあるはずです。聖書には次のように書かれています。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。（イザヤ　55・6）

聖書のどこにも「自分の好きな時に主を呼び求めよ」とは書いてありません。もし神がおられないなら、好き勝手にしてもよいでしょう。しかし、「神は厳然と生きて」おられます。ですから、何が善で、何が悪であるかは神が決められるのです。

主なる神は生きておられます。私がなぜ主が生きておられることを百パーセント確信できるかというと、主はイエス様を通してその存在を告げ、私たちにご自身を啓示されたからです。イエス様がこの地上に来られて以来、主なる神に対するどのような無関心も、また主を拒否する心も、すべて無知と悪意あるものになりました。主は確実に生きておられ、善悪の基準を持っておられます。もしあなたが、「私は異なった道徳観を持っているのだ」と言い張るなら、あなたは神の御前で自分の考えと人生について申し開きをしなければなりません。



善悪を決めるお方は神であると知った時、私たちは非常に大きな解放感を覚えることができます。聖書のみことばを通して、神は私たちにはっきり語っておられます。「そんなことまで聖書に書いてあるのか」と驚く方がいますが、聖書には「性の領域」に関しても善悪の基準が明示されています。従って、この領域について神は何と言っておられるのか、聖書を見る必要があります。

神は、何と言っておられるのか

主なる神は性を肯定しておられます。聖書は、神が天地とともに人間も創造し、男と女に創造した、とはっきりと語っています。神はそれぞれの性をも創られたのです。これは触れてはいけない領域ではありません。だから私は、このことについて公然と話したいと思います。神は私を男として造られ、ここにおられる男の方々も造られたのです。そして、女性は神によって女として造られました。ですから、女性が男のようになろうとしたり、男性が女のようになろうとすることは病的であるとしか言えません。神が人を男性あるいは女性として造られたのであって、人間の思いで性を代わるなどということはあり得ないのです。男性であるか女性であるかは、神の創造のうちに厳然と定められています。

しかし、現代の人間は堕落した被造物になり、この世は初めに神が計画されたものとは全く異なったものになってしまいました。中でもこの重要かつデリケートな性の領域が危険にさらされています。それゆえ神は、この領域をしっかりと守ろうとされました。

神は、婚姻を通して性を守られる

主なる神は、性を肯定し、婚姻制度を通してそれを守っておられます。結婚は社会的な契約ではなくて、神みずからが造られたものです。

あるアメリカ人の心理学者は、キリスト者ではないのですが、次のように書き記しています。

「性の問題全体について、聖書ほどはっきりと書かれたものはありません。聖書には、『神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。』(創世記　1・27)とあります。私は、キリスト者ではありませんが、心理学者として婚姻制度が正当であると言明します」

神が定められた「結婚」とは、あるテレビタレントのように何度もやり直す手軽な結婚ではなくて、たった一度の誠実な結婚のことです。神は、愛と誠意をつらぬいた婚姻制度を創造されたのです。

ここで結婚について少しお話したいと思います。妻たちは、夫のためにおいしい食事を作ったり、ボタンを縫い付けたりしていさえすれば、それが良い妻だと思ってはいませんか。また、夫たちは家計を維持するために妻に必要なお金を渡してさえいれば、それ以上関心を持たなくても十分だ、と思ってはいないでしょうか。結婚生活は、「神のみこころに従って孤独から解放されるものであるべき」なのです。すでに結婚しておられる皆さんの結婚生活は、果たしてそのようになっているでしょうか。もしかすると、この機会に二人で話し合う必要があるかもしれません。「私たちの結婚生活は、孤独からの解放であるべきなのに、私たちはどこに向かっていたのだろう」と。

主なる神は「人が、ひとりでいるのは良くない」(創世記　2・18)と思われ、助け手を造ってくださいました。これがまさしく孤独からの解放だったのです。

ここで一つ思い出話をさせてください。私がまだ少年だった頃、姉と二人で初めて親戚の結婚式に連れて行ってもらいました。初めて見る結婚式は、すべてが興味深かったのを覚えています。教会までは馬車に乗って行き、式の後はホテルで盛大な食事会がありました。姉と私はデザートのアイスクリームを楽しみに待っていましたが、退屈なあいさつが続きました。しかし、あるおじさんのあいさつを今でもよく覚えています。その人は、皆を笑わせようとして次のように話し始めました。「ご参列の皆様。天国には結婚したことを一秒たりとも後悔したことのない夫婦のために、二つの椅子が用意されているそうです。しかし、今日までその椅子には誰も座ったことがないそうです」

この瞬間、彼の挨拶は中断されました。私の父が母のところに駆け寄って、「その椅子は私たちのものだ」と叫んだのです。私は幼な過ぎてその深い意味はつかめませんでした。けれども、私の心の中にはこのように温かい家庭で育った喜びがあふれました。あなたの結婚生活もそのように温かいものになっていますか。主なる神は結婚をそのように想定しておられるのです。

私が結婚した時、一人の同僚が次のようなスピーチをしてくれました。「神は、いつもそばにいてくれる助け手を創造されました。彼の上に立って支配しようとする女主人ではなく、足元に置かれている女奴隷でもなく、またどうでもいい存在として脇に置かれている者でもなく、いつもそばにいる助け手を」と。

銀婚式の時、母を見つめながら「この二十五年間で、私はますます君を愛するようになったよ」と言った父の言葉に、私は深い感動を覚えたものでした。二十五年もたてば結婚生活は冷たくなっていることが多いのではないでしょうか。しかし、そんな時、

配偶者に次のように言うべきではないでしょうか。「もう一度最初からやり直してみよう」と。その通りです。それは、可能なのです。

若者の中には、結婚などまだ全く考えられないという人が多くいます。そのような人々は、「自分がしたいようにすればいい」のでしょうか。

神は、清い青春期を望んでおられる

その昔、イサクという若者がいました。父親は彼の妻を見つけようと思いました。イサクもまた、野に出て行って妻を与えてくださるように祈りました。彼は妻を与えてくださるのは神ご自身であると確信していたからです。そして彼は、まだ全く知らない妻に対して、誠実であり続けたのです。

自分は結婚などできない、と思い込んでいる若い男性の皆さん。どうか確信を持ってください。神がきっと最善の時にふさわしい相手を与えてくださるということを。まだ見ぬ相手の女性に対して誠実であり続けるなら、神はどんなに喜んであなたを祝福してくださることでしょう。女性の皆さんも同じです。神が与えてくださる未知の相手に対して、終始一貫、誠実であり続けるべきなのです。これが聖書の考えです。主なる神は清い青春期を望んでおられます。

かつて私は、ある精神科医から次のようなことを聞いたことがあります。「女性の本心は、一度しか開かないのです。ですから私は、女性は基本的に一度しか本心から愛することができないと確信しています。たとえ七回結婚したとしても、結局は最初の人を愛し続けるのです」と。そこで、私は答えました。「興味深いことです。あなたは心理学を通して、神のみことばと同じ真理にたどりつかれたのですね」と。

以上のことからはっきり言えることは、婚前交渉、同性愛、姦淫、離婚などはすべて罪であって、聖なる神の裁きの前に立つこととなる、ということです。

私は、若い時に神のみこころを知り、神だけが正しいお方であることを知りました。そしてそのことが、私の人生にとって大きな助けとなったのです。

苦しみはどのように克服されるのか

聖書には、次のような感動的な場面が記されています。

生ける神の御子であるイエス様が宮で民衆に教えておられる時、律法学者とパリサイ人が、一人の女を連れて来て、言いました。

「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。」（ヨハネ　8・4～9）

ここで、皆さんにお尋ねします。「あなたがこの場にいたら、自分は罪がないと思って、この女に最初の石を投げつけることができますか」。誰一人、できないのではないでしょうか。そうです。私たちは皆、罪人なのです。

この人たちは大きな間違いをしました。良心の呵責にさいなまれてその場を去ったのですが、むしろ神に次のように言うべきではなかったのでしょうか。「主イエス様、私はこの女の横に自分自身の身を置きます。あなたは彼女を地獄に落とされませんでした。どうか私たちをも助けてください」と。

今の時代、性的な悩みについて助けてくださる方はイエス様以外にありません。私自身イエス様の助けによって生きてきた者としてそう言うのです。私がイエス様についてお話をする時、単なる理屈を並べているのではありません。イエス様は、私の人生にまことのいのちを与えてくださいました。牧師とは言っても中性的な存在ではなくて、一人の男性です。私もあなたがたと同様に救い主を必要としているのです。そして、イエス様がどのような救い主であるのかを、二つの面において体験的に知ることができました。



イエス様は、罪の負い目を赦されるお方

牧師も、祭司も、あなたの罪を赦すことはできません。あなたが汚れた思いを一つでも抱けば、それは神に対する取り返しのつかない負い目、罪となります。そして、神に対するすべての罪を背負って主の前に出、主のさばきに会い、永遠の滅びに至ります。だから、その前にイエス様を見出し、罪を告白し、赦していただかなければなりません。イエス様ただお一人だけが、私たちの神に対する負い目、罪を赦すことができるお方です。イエス様の十字架の前に自分のたましいを置いて、次のように言ってみてください。「私の若い日の罪をすべて御前に差し出します。私と暗闇との関係を、包み隠すことなくすべてあなたに告白します」と。そして十字架を見上げ、次のように言ってください。「あなたのとうとい血潮は私のために流されました。私はそのことを信じ、受け入れました。それによって、私のすべての過ちも清算されました。キリストが私のために死んでくださったゆえに」と。

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（1ヨハネ　1・7）

これこそ、私たちを解放してくださるみことばです。

私は十七歳の時に軍隊に入り、泥沼で溺れるような極限の日々を強制されました。それは荒れ果てた、汚れた生活でした。そのようなある日、突然、次の思いに圧倒されました。「私の若い日々の汚れを、一体誰が取り除いてくれるのだろうか」。そしてその時突然、「イエス様が十字架で私の過去を清算し、私の罪を赦してくださった」という思いが、私を貫

いたのです。私がイエス様に立ち返ったのは、まさにその時でした。もはや、イエス様なしに生きることは、不可能でした。

デュッセルドルフで開かれた大きな集会で、私はイエス様が十字架にかかって私たちの代わりに罪の赦しを成し遂げて下さったことを話しました。集会が終わり、参加者が外に出始めた時、一人の背の高い紳士が、興奮した様子で問いかけてきました。「罪の赦しがあるとおっしゃいましたが、それは本当ですか」。私は喜んで答えました。「その通りです。私はそのおかげで生きているのです。ですから神に感謝しています」と。彼は続けました。「私は精神科医です。多くの人々が心の病をかかえて私の所に来ます。彼らにはコンプレックスがあるのですが、一体何が原因で悩んでいるのか分かりません。多くの場合彼らは、覚えていないか、あるいは思い出したくない昔の罪の呵責を心の底に秘めているのです。私はじっくりと時間をかけて、昔あったことを無意識から意識の中へと引き出そうと試みます。しかし、そこで私の力は尽きてしまうのです。私は、昔の罪を光の中へ引き出すことはできます。それは嘘であったり、争いごとであったり、淫らなことであったりします。しかし、絶望的なのは、私はそれらの罪をどうすることもできない、ということです。だからブッシュさん、罪の呵責を取り除くことのできる方が本当におられるのですか。それは本物ですか」

これに対して私は喜んで「はい、おられます。それは私たちを造られた神ご自身です。私はその神に感謝します」と、証しします。聖書に記されている「イエス様は、私たちの罪を赦すことがおできになる」という事実、これこそ、もっと多くの人々が知るべき、神の偉大な救済なのです。

イエス様は、悪い関係を絶たせてくださるお方

ある時、若く美しい秘書の方に言ったことがあります。「あなたが上司との恐ろしい関係を絶たなければ、あなたの未来は地獄ですよ。彼と彼の家族の幸せを奪わないでください」。彼女は顔を曇らせながら次のように答えました。「私は彼を愛しているのです。だからやめられないのです」。私は言いました。「しかし、彼には妻子があります。あなたはとても残酷なことをしています」。少し考えた後に、彼女は繰り返しました。「私はどうしても止められません」と。この時、私は彼女が自分ではどうしても絶つことのできない関係に苦しみ抜いているのを感じました。そこで私は答えました。「罪の縄目を断ち切ることは、私たちにはできません。しかし聖書はこう言っています。『神の御子イエス様によって罪から解放された人は、本当に自由なのです』と。イエス様を呼び求めてください。そうすればこのような暗闇の関係も断ち切ることができます」

私の好きな歌の中に次のような歌詞があります。「イエス様が来られたので、私はすべての束縛から解放されます。死の拘束からも断ち切られます。神の御子が私たちを解放してくださいます。私の汚れた罪から、主の栄光のもとへと、すべての束縛から私を解放してくださいます」

このように、私たちの性の悩みや罪の束縛を見る時、すべての人が救い主を必要としていることが分かります。イエス様が、すばらしい現実的な解決を与えてくださいます。この救い主なくしては、あなたの人生は惨めなものです。

全世界は、「神の愛」を求めている

多くの女性方から、次のように言われます。「私は四十を過ぎているのに、結婚する相手がいないのです。私は一体どうなるのか不安です」と。

私は熱心な平和主義者ですが、実はこういう悩みを持つ女性の発言を通して、そのようになったのです。ドイツでは第二次世界大戦で五百万人以上の若い男性が戦死しました。つまり、それは五百万人以上の女性が結婚する道を絶たれたことを意味します。この五百万人以上の女性の悩みだけを見ても、戦争に反対する立派な理由になります。

彼女たちが将来を共にし、二人で幸せになったであろう男性たちは、不幸なことに戦場で亡くなったのです。とりわけ、将来を誓い合った恋人の死をその耳で聞かなければならなかった気の毒な女性の心情は、いかばかりであったことでしょう。

そして、絶対数が不足した状況では、どうしても不倫関係が増えてきます。しかし、このような関係にある女性に対して、私は心からお願いしたいのです。「どうか、あなた方が失ったもののために、人から盗むという罪だけは犯さないでください。どうか、他人の結婚生活を壊さないでください」と。戦後のドイツ国民は大きな試練と困難に直面しているのです。お気の毒な女性の皆さんから「それでは私たちはどうなるの。どうしてくれるの」と詰問されたら、私は涙を抑えてこう答えます。「あなた方がそのように導かれたのなら、それに従ってください。結婚できないからといって、必ずしも貧しいわけではありません」

聖書は、タビタという未婚の女性について語っています。彼女はヨッパという町に住んでいました。彼女が死んだ時、弟子たちに呼ばれてペテロがやって来ました。ペテロはてっきり老女が孤独のうちに死を迎えたのだと思っていたのですが、その部屋に入って驚きました。そこにはたくさんのやもめが集まっていて、共に泣き、タビタが作ってくれた上着や下着の数々をペテロに見せてくれたのです。おそらくタビタは、多くの孤独な人々を訪ねては話をし、足りないものを補い、面倒を見ていたのでしょう。町の子供たちも彼女になついていたことでしょう。それらの人々にとっては、タビタが訪ねてくれた時が、生活の中でかけがえのない喜びの一時だったことでしょう。

共通するものの全く無い冷え切った結婚生活に比べて、タビタの一生は、果たして、貧しく、惨めなものだったでしょうか。いいえ、それは皆に親しまれ、豊かで充実した人生だったのです。

ドイツ語には愛を現す単語はたった一つしかありませんが、ギリシャ語には二つあります。新約聖書はそのギリシャ語で書かれています。この章で使ってきた「愛」という単語は、ギリシャ語では「エロス」といいます。どちらかというと性的な意味が濃い言葉です。ギリシャ語で愛を現す二つ目の言葉は「アガペ」といい、「神の愛」を表します。つまり、「肉の愛」と「神の愛、霊の愛」です。

結婚しない女性は、与えられている道に従って人生をこの「アガペ」、神の愛で満たしていただければと思います。今のこの世は、そのような「神の愛（アガペ）」に飢えており、それを必要としているのです。

さて、これまで私が語ってきたことをまとめますと、善悪を決定するのは神ご自身であり、神が要求されるのは清い青春期であり、誠実な結婚生活を送ることです。そして結婚に導かれない場合には、その独身の道を肯定することです。

また私が述べてきた現代の性の問題は、そのごく一部にしか過ぎませんが、性の問題のすべての解決

策は「肉の愛」を離れ、主がくださった「神の愛、霊の愛」に身を置くことにあります。主なる神は聖書を通してこのことを繰り返し説き、また、イエス様や多くの信徒たちの行為を通してその模範を示されました。私たちがこの問題に苦しむ時、そこからの解放は、主から出る「聖い愛、神の愛、霊の愛」によって初めて与えられるのです。

私たちが受ける権利のない愛

最後にもう一度、イエス様の話をしたいと思います。

この章の主題は「真の愛」ですが、私たちが全く期待できない愛、愛されるはずがない愛、受ける権利の全くない愛を、限りなく降り注ぎ、永遠に愛してくださるお方が存在することを心に銘記しなければなりません。それこそ、イエス・キリストが無償で私たちに与えてくださる「神の愛」なのです。

私たちは罪人であり、救い主を必要としています。私の個人的な証しをさせてください。ナチスの第三帝国の時代、私は信仰のゆえに投獄されました。刑務所所属の牧師によると、私の出獄の見込みは非常に乏しいものでした。私は狭い独房の中に閉じ込められて、寒さに凍えていました。そこには、かすかな光が射し込む裂け目がたった一つだけありました。むごい寒さの中で、妻や子供たち、かつて教会に集っていた若者たちのことを思い、私の心は痛みました。希望はなく、夜になるとたまらない絶望感に襲われました。あなたも人生のどこかで、同じような真の絶望を体験されたことが、きっとあることと思います。

まさにその時です。主イエス様が、私の独房に入って来られました。主は生きておられます。カギのかかった扉も通ることがおできになります。主は入って来られ、十字架で罪人の私のために死んでくださったそのお姿を私に啓示してくださったのです。そして、私の耳元でささやかれました。

わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。（ヨハネ　10・11）

この時、イエス様の手から「神の愛」が一気に私の上に流れ下り、私の心は圧倒されるばかりでした。そして私は、この自分のような者には受ける権利がなく、受けるには怖れ多い愛がある、と気づいたのです。その愛は、私たちにただ一方的に与えられるものであり、あなたにも提供されているものなのです。どうかその愛の流れを、そのままやり過ごさせないでください。その愛はあなたの心の中にも流れ込みたい、と願っているのです。



神は真実な方

古川 卓（たかし）



妻の恭子さんと

これまで私が歩んできた道は多くの波乱や挫折もあった道程でした。そんな暗闇のなかで滅びの道を歩んでいた私を、イエス様が憐れまれて信仰の恵みを与えてくださったのは、今から十九年ぐらい前、御代田に礼拝所ができたころです。

私は信仰を与えられてからのほうが大きい試練に会いました。イエス様にすべてを明け渡すことができない私は大いに悩み、苦しみました。しかし、その試練を経験したことで、イエス様のみこころをより深く知ることができました。今は、試練をも益としてくださったイエス様に感謝し、畏れかしこむ日々を送っています。

人は生まれると苦しみに会う。火花が上に飛ぶように。

（ヨブ　5・7）

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。

（イザヤ　25・1）

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・11）

私の人生の後半に与えられた二つの試練を通してイエス様が本当に大きな喜びと大いなる恵みを与えてくださったことを証しさせていただきます。

私が健康を取り戻し、平穏な気持ちで毎日過ごせるようになったのは、ごく最近のことです。一時は死を覚悟したほどですから奇跡が起きたようなものです。

私が原因不明の病に冒されたのは、二〇〇六年のロス・キャンプから帰って間もなくのころでした。

身体の至る所に赤い発疹ができて、腰掛けにも痛くて座れないような状態でした。痒くて毎日拷問を受けているようでした。あちこちの病院に行きましたが、いずれの病院でも原因がわからないとの診断でした。ところが、最後に訪れた病院の医者が私の症状を見て、「あなたは、最近、何か深刻な悩みや苦しんだことがありませんでしたか。もしあったとすれば、それがストレスとなって症状に出たのではないですか」と言われたのです。精神的な苦痛がストレスとなって病を引き起こすとは聞いていましたので、過去の会社勤務時代にあったことが、ストレスとなっていたのだと思い至りました。

いろいろな治療を受けましたが、いっこうに良くはなりませんでした。そのうちに、しだいにやせ衰えて、起き上がれないようになりました。苦しみで、睡眠もままならず、衰弱が激しく、自分なりに死は近いと思うようになりました。

そんなときに心に毎日浮かんでいたのは、言い知れぬ孤独感、寂寥感、虚無感といったものでした。自分は何のために今まで生きてきたのか、自分の人生は空しいものであったという思いがつのり、毎日暗闇の中をさ迷っていました。信仰を与えられていながら、いざとなると心が乱れて、次のみことばも慰めにはならない、本当に罪深く、イエス様から離れてしまっていたのです。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

みこころに忠実ならば、喜んでこのみことばに励まされ慰められるはずですが、私はもはや死ぬことが脱出であると考える愚かな者でありました。それでも、聖書は毎日拝読していましたし、お祈りもしていました。しかし、結局行きつくところは、イエス様にすべてを明け渡すことはできない、ということでした。

そんなあるとき、ふと、祈りとは何だろうかと頭に浮かんだのです。それまで、祈りとは主に願うことであり、主との交わりであると捉えていましたが、もっと深い意味もあるのではないかと示されたのです。それは、もしかしたら「祈りとは主に聞くこと」ではないかということです。つまり、みことばは心を静めて聞くという姿勢があって初めてイエス様との交わりができるのではないかと示されたのです。そして、今までは、自分の思いだけを申し上げて祈っていたのだと、深く悔い改めさせられました。

そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。（1サムエル　3・10）

そのような新たな姿勢で聖書を読んでいたところ、次のみことばが目に焼きついたのです。このみことばは、今まで何度も目にしていたにもかかわらず特別に今回私の心に響いたのは、イエス様の働きによる、と思わされました。

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではな

く、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

（エペソ　2・4～5、8～9）

このみことばは暗闇の中に迷い込んでいた私を再び光のなかに引き戻してくださいました。つまり、イエス様が一方的に恵みとして私を導いてくださったのだから、死ぬのも、生きるのも、主のものではないか。すべてをイエス様に明け渡せばよい、ということを示されたのです。結局、自分ではどうしようもない、ギブ・アップしなさい、ということでした。本当に私のような愚かで傲慢な人間でも、みことばを静まって、へりくだって聞く姿勢をとっていれば、主は恵みのみことばを与えてくださるのです。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。

（詩篇　119・71～72）

その後、示されて薬をやめて食事に気をつけるだけにしました。そうこうしているうちに、本当に不思議なことに、自然に快方に向かいはじめたのです。わけもわからない病気になり、わけもわからないうちに治りはじめたのです。これは、主が働いてくださり、試練とともにまさに脱出の道を用意してくださったのではないでしょうか。それ以外に考えられません。主のくすしいみこころによるものと深く感謝しています。主のみこころによって、また集会に集うことができるようになりました。お祈りいただいた多くの兄弟姉妹にも深く感謝しています。

次に先ほどの病の原因となったストレスのことをお話しして、このストレスこそが私の心を大きくイエス様に向ける動機となったことを証ししたいと思います。

たしか二〇〇一年だったと思います。それまで、大変な活況を続けていた半導体産業が急変し、一気に不況に突入しました。

私が勤務していた会社も影響を受け、受注、売上げが急激に大幅に落ちこみました。増産のために何十億という設備投資を行ない、ようやく新工場を稼働させようとしていたときでしたので、まことにタイミングが悪く、新鋭設備はまったく稼働せぬうちに遊休設備となりました。幸い設備は自己資金で手当てしましたので、すぐに資金的に行きづまることはなかったのですが、大幅な売上減の状態が続けば当然月次ベースで赤字になるのは時間の問題でした。さらに新設備による償却負担の増大も大きな足かせになりました。こんな状態が一年も二年も続けばどんな会社でも資金が窮屈になります。会社の財務内容はそれまで決して悪くはなかったのですが、さすがにピンチを迎えました。複数の取引銀行に融資を依頼しても当然ながら赤字の会社に快く引き受けてくれるところなどありません。しかし、会社にとっては、資金が枯渇すればいずれ倒産に追い込まれます。身体にたとえれば、資金は血液ですから血液がなくなったら死です。

当時、どこの金融機関も大変きびしい状況でしたので、銀行との折衝は非常に困難でした。会社も給与カット、資産の売却などを行い、固定費の削減などに努力をしたのですが、不景気が長引き、ついに人員整理などの荒療治をしなければ立ち行かない状況を迎えたのです。もし、人員整理が思い通りにいかなかったら、金融機関は会社を見限ることは明らかでした。従って、会社としては何が何でも固定費の削減、つまり、悪い経済状態でも赤字にならない体質にすることを迫られたのです。

この作業のなかで、私は精神的にこんなに苦しみ、

悩みがあるのかと思うほど辛い経験をしました。詳細は避けますが、苦しみ、悩みとなった主なものは次のようなものでした。

①私は当時すでに救われた者でしたので、クリスチャンたるものが、人の首を切ることは許されるのかという悩みです。イエス様を恐れました。

②不安と恐怖、もし倒産したら私は社会的な制裁を受けることになります。曲がりなりにも上場会社ですから、多くの株主、お客、仕入先、外注先などの協力会社やその社員などに多大の迷惑がかかります。そのことを思うと肉の思いを捨てきれませんでした。1ペテロ5章7節の「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」というみことばに従うことはできませんでした。

③人員整理をするには労働組合の了解を得なければできません。組合は経営者の経営判断の誤り、過剰設備などを申し立てて、労働組合にしわ寄せするのは筋違いと強硬に反対してきました。組合の理解は会社再建のポイントですから、何としてでも接点を見つけなければと、まったく平安な気持ちではおられませんでした。

④人員整理を行うことは、長年、お互いに励ましあってきた人間関係を断ち切るということです。従ってその人達に「辞めてくれ」と言うのは本当に辛い仕事でした。これは本当にストレスが溜まる仕事です。私は直接人に当たることはほとんどありませんでしたが、それでも身を切られる思いでした。

⑤会社が傾くと人心も乱れます。会社の内外を問わず、陰に回って足を引っ張る者、人を裏切る者、等々いろいろなことが露呈してきます。これらの渦中にいると、人間不信となり、物凄い孤独感を覚え、「落ちぶれて、袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」という林子平の詩が身に沁みてわかりました。

人は自分を含めてあてにならない、人は結局自分のことしか考えない者で、善などどこにもない、悪を犯す罪人だということを身をもって体験しました。

このような状況のなかで、昼間は目の前の火の粉を振り払うのに躍起になっていましたので、悩みどころではないのですが、夜、床に就くといろいろ考えてしまい眠れない日もありました。しかし、今思うと夜の祈りでは直接イエス様助けてくださいという祈りはしなかったように記憶しています。まだ、ギブ・アップという気持ちはなかったのでしょう。しかしながら、私の心のなかにイエス様に安らぎを求めていたのは事実で、きっとイエス様はこの状態を見てくださっていて、いつかみこころをお示しくださるのではないかとは考えていました。

そうこうしていると、ときが満ちたのか、組合が理解をしてくれて、希望退職ということで結着しました。双方涙の結着でした。そのことによって逃げ腰であった一部の銀行も話がまとまり、融資してくれることになりました。大騒ぎであった社内も平静を取り戻し、多くの社員が退社していきました。不思議なもので、騒動が一段落すると、景気が上向きになり、会社の業績も急回復しはじめました。足かせとなっていた新工場も稼働し、利益獲得に大いに貢献するようになりました。

結局、この一連の作業が、私の心の中に大きなストレスとなってよどんでいたのです。このストレスが病の原因だったのです。その後、私は第一線からは身を引きましたが、やはり人を解雇したことは長く気にかかっていました。そんなとき、家内からドイツ・キャンプに行こうとの誘いがありました。たしか、二〇〇三年秋のフィリンゲンのキャンプでした。キャンプ中にベック兄から、明日五分間の証しをしなさいと指示されました。その晩部屋で何を証しすべきか、五分間でどうやって収めるかと悪戦苦

闘していると、突然大きな喜びがわいてきたのです。えも言われぬ過去に経験したことがない不思議な喜びでした。イエス様が苦しみを喜びに変えてくださったのだと悟りました。感激でした。このとき、初めて主はともに生きていてくださるのだと云うことを実感しました。

翌日、多くの兄弟姉妹が祝福してくださったこと、また、その後の交わりの素晴らしかったことは忘れることができません。長い間、イエス様に抵抗してきたことを、本当に悔い改めました。

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。（ヨハネ　16・33〜34）

人は苦しみや悩みを通してでなければ信仰の道に入ることは難しいと言われますが、まさしく私は、大きな試練を与えられたことによって救われ、大きな喜びを与えられました。私はこの大きな二つの試練を通して、イエス様は本当に愛のある方であり憐れみ深い方で、畏れかしこむべき方であることを改めて悟らされています。まだまだ、罪から脱却できず、イエス様にすべてをおゆだねできない哀れなものですが、これからも、イエス様を畏れて、お従いできるように主に祈って行きたいと考えています。

最後にみことばを拝読して終わります。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。（イザヤ　38・17）

そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。（ルカ　1・50）

古川　卓
一九三四年静岡県浜松市生まれ
慶応義塾大学法学部法律学科卒業
元黒田精工株式会社取締役社長
元日本フルードパワー工業会会長





右から2人目、亜紀さん

私たちの国籍は天にあります

藤田　亜紀（あき）

私は四人兄弟の末っ子として北海道に生まれました。家族や知人にクリスチャンはおらず、私自身も聖書とは縁のないまま高校を卒業しました。小樽の大学生時代に壁につきあたり、本当に信頼できる確かなものを求めて聖書に行き着き、聖書を読む中で本当に信頼できる確かなお方であるイエス様に出会いました。その後、祈って進路変更に至り山形の大学に入学し、初めて行った教会で洗礼を受けました。卒業後、東京に就職し、二〇〇七年七月吉祥寺キリスト集会の礼拝に初めて足を運びました。礼拝中に読まれた聖書のみことばの一つひとつが心にしみ入り、涙が出てきました。初めてイエス様に出会ったときのような気持ちでした。

今、キリスト集会に集い始めてから四年がたちました。その間に、主イエス様は数え切れないほど多くのすばらしい恵みを見せてくださいました。それらの恵みの中からごく一部を話させていただきます。

まずは父のことです。二〇〇八年六月、それまではイエス様にまったく関心を示さなかった父母が、多くの方々の祈りにより、ドイツの喜びの集いに参加することができ、兄弟姉妹と時をともにすることができました。ドイツでは二人とも非常に楽しそうでしたが、はっきりとイエス様に出会ったわけではなさそうでした。その翌年二〇〇九年二月、父が前立腺癌で病状が悪化し入院した、と母から電話がありました。

父が召される一ヶ月前の二〇〇九年五月に、ドイツでご一緒させていただいた芦屋集会の山下ご夫妻と赤井ご夫妻が、はるばる北海道の病院までお見舞いに来てくださいました。入院中の父は、皆さんがお見舞いに来てくださったその日だけは非常に体調もよく、嬉しそうないい顔をしていました。病院で山下ご夫妻と赤井ご夫妻は父のために賛美し、祈ってくださいました。私はそれだけで感謝で胸がいっ

ばいだったのですが、兄弟たちが祈り終わった直後に、父は「私も祈ります」と言って、初めて自分のことばで祈ったのです。短い祈りでしたが、「主イエス様に心から感謝します」と父は祈りました。その瞬間、私の目から嬉し涙があふれ出ました。父の口からこのことばが出てくるなんて信じられませんでした。私はこのとき初めて「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒　16・31)という聖書のお約束を心から信じることができました。と同時に、聖書の約束である家族の救いを信じきれないでいた自分の不信仰を悔い改めました。父と同じように、母、兄、姉、叔父さん叔母さんが主を喜ぶときを先取りし、主に信頼して祈りつつ待ちたいと思っています。

あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。　(ヨハネ　20・29)

職場でも、主イエス様はご自身のめぐみのわざを見せてくださいました。ある五十歳代の末期癌の患者さんは、二回目にお会いしたときに「いまさら神様に頼るわけにはいかない」とおっしゃいました。「神様に頼るのに遅すぎることはないですよ」とお話しし、「イエスキリストの隣で十字架につけられた人は、地上の最後の日の最後のときに『あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください』とイエス様に頼り、『あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます』とイエス様に声をかけられ、その日のうちにそのみことばのとおりになったんですよ」とお伝えすると、その方は「ありがとう」とおっしゃいました。聖書のみことばの小冊子もお渡しして毎回いろんなお話をする中で、その方は「自分は今、赦されていることを心から感謝している。癌になったことにも感謝している。そうでなければ赦されていることを知ることもなかったかもしれない」と無邪気な笑顔で言われました。主イエス様がその方のうちに働かれたとしか思えません。その方が召される約二ヶ月前にベックさんとの交わりが与えられました。そのときはすでに癌により声が失われていましたが、その表情から主イエス様と出会われたことが良くわかりました。その後の激しい病状の変化の中でも、その方の内面は最後まで穏やかでスタッフも驚くほどでした。往診のときにベッドサイドで祈りました。主が彼のうちにおられ、誰も奪うことのできない平安を与えてくださっていることがよくわかりました。最後の日は眠るように穏やかに天国に召されました。

わたし(イエス)は、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。　(ヨハネ　14・27)

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。　(ローマ　8・38〜39)

また、ある九十歳代の不整脈の患者さんは、診察室で「先生。生きていてもむなしいよ」とおっしゃり、私が「でも、天国には希望がありますよ」と伝えると、「先生も古いねえ。天国なんてあるわけないよ」と言われました。九十歳代の方に「古い」と言われてやや戸惑いましたが、「いや、これは私の作り話ではなく、聖書が言っていることなので、本当のことですよ」と言うと、その方は真剣な表情になり、聖書のみことばの小冊子をお渡しすると、とても喜んでくださいました。家庭集会にお誘いすると本当に喜んで来てくださり、ベックさんから主イ

エス様を紹介されました。その数ヶ月後、その方は診察室で「私ももう長くないけど、行き先が決まっているから安心だよ」と天を指差し満面の笑みを浮かべておっしゃいました。主イエス様はまぎれもなく、この方に天国の希望を与えてくださったのだと知りました。主イエス様に出会われていることを確信し、祈りつつ交わらせていただいております。

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

また、これは最近のことですが、以前から御代田で何度かタクシーに乗せていただいたご年配の運転手の方に九月の御代田の喜びの集いの帰り道にも乗せていただき、集会の本をお渡しして、「十一月にも喜びの集いがありますのでいらっしゃいませんか?」とお誘いしたところ、「勤務のタイミングが合えば行きます」とおっしゃいました。不信仰な私は半信半疑でしたが、その間の約二ヶ月間、麻布の祈り会で兄弟姉妹にその方のことをお祈りしていただきました。十一月の御代田の集会の数日前にその方にお電話すると「土日はびっしり仕事が入ってしまったので金曜日の夜だけなら参加できます」とのこと。私自身は仕事で金曜日の夜の参加は無理だったので、ある姉妹に待ち合わせをお願いしました。その方は集会に参加し、多くの兄弟方と交わることができたそうです。主は麻布の祈り会の兄弟姉妹の祈りに応えてくだり、ふさわしい交わりを豊かに備えていてくださり、その方の心を喜びで満たしてくださいました。主イエス様ご自身がはっきりとその方に語りかけてくださり、さらに喜びで満たしてくださるように祈っています。

だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（マタイ　7・8）

私自身は傲慢で臆病で信仰の薄い者であっても、主イエス様は、ご自身の御心を、人の思いを超えて行われることを知りました。主が再び来られるそのときまで、この主に信頼し従わせていただきたいと祈っています。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

（イザヤ　53・5〜6）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

藤田　亜紀

一九七三年北海道生まれ。帯広三条高校卒、小樽商科大学中退、山形大学医学部卒。城南福祉医療協会大田病院などでの勤務を経て、現在、医療生協養生会菊坂診療所所長。

追記：藤田姉妹がイエス様に出会われたいきさつは「主は生きておられる」16号に掲載されています。



右から2人目、麻美子さん。ご家族といっしょに

測り知れないイエス様の力

黒田 麻美子

「私は信じた。それゆえに語った。」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語るのです。それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。（2コリント 4・13〜15）

私は、父黒田禮吉・母由紀子の二番目の子供として一九七六年に生まれました。私が幼稚園の頃、母が救われ、キリスト集会に集うようになりました。その二年後に父も救われ、家族で集会に集うクリスチャンファミリーとなりました。聖書の意味はわからなくても、主は幼い私の心に働いてくださり、神様がおられること、それがイエス様であること、また天国があり、自分もそこに入れると素直に信じていました。

小さい頃から心配性でしたので、イエス様はなくてはならないお方でした。夜になり明日の不安が募ってくると、布団の中で声を出してよく祈りました。イエス様は私の一番の相談相手であり、何でも正直に話すことができました。

高校生になり進路選択をする時、将来は神様に喜ばれる仕事をしよう、役に立ちたいと思い、看護学校へ入り、三年間の寮生活を経験しました。勉強や実習は想像以上に大変でしたが、主がいつも助け手となってくださり、苦労しつつも国家試験も通り、初めて就職した病院の配属先は念願の小児病棟でした。

そこは、出生間もない新生児から十五歳までのあらゆる種類の病気を患った子ども達が入院していました。子どもは、とてもかわいくてその成長の背後にいつも神様の守りを感じました。しかし、現実の

私はそこに目をとめる余裕もなく、忙しすぎて業務に追われました。一人の子が泣き出すとみんなが一斉に泣き始めます。ミルクをあげてオムツを替えて処置をして、またその繰り返し・・・出産も育児も経験のない私にはそれだけで手一杯でした。誰かが急変すると手が回らず、泣かれると口を塞ぎたくなる思いにも駆られ、そんな自分に気づいては絶望しました。一方でそれが自分の本当の姿だと認めたくありませんでした。イエス様を信じていたけど、自分自身の罪については鈍く盲目で、独りよがりの信仰でした。苦しんでいる子ども達やご家族がたくさんおられたのに、イエス様の話はできず、私の祈りは自分のことばかりでした。

主は、そんな霊的状態を放っておかれませんでした。仕事に慣れて来た三年目に、私が担当していた患者さんが明け方突然、亡くなりました。新人の時から関わってきた脳性麻痺の女の子でした。インフルエンザによる呼吸状態の悪化で予断を許さない状況ではありましたが、その晩はあまりにも穏やかで、まさか死亡とは思いもつかず、私は動転してしまいました。息をひきとる瞬間その子と目が合い、顔を見ていて、なんとも言えない気持ちでした。救命処置が施されましたが、何の反応もなく、私は無力でした。

頭の中は真っ白でしたが、信仰を隠していた私に主が働いてくださいました。私の思いとは関係なく、婦長や主任を前に初めて、自分はクリスチャンであるからお焼香はできませんと言っていました。はっきり言えたことでお焼香からも守られ、最後のお別れの場面で患者さんのお顔を見ることができました。その顔はとても安らかで、眠っているようでした。

しかしその後、呆然として家に帰り着くと、なぜ急変したのか、何が起きたのか、何か間違っていたのか、もし私が担当ではなかったら・・・という思いでいっぱいになり、後悔とやるせなさで、しまいには「私が殺してしまった」という思いで押し潰されそうになりました。苦しくて、「イエス様、ごめんなさい。私があの場にいなかったら良かったのです」と泣きながら、祈りにもならない思いで叫んでいました。消えてなくなりたいと本気で願いました。自分には何の力もない、いのちはあまりにもはかなくて、あっけないと痛感せずにはいられませんでした。

聖書もこわくて読めなかったのですが、イエス様は「日々の光」（聖句集）を通してみことばを与えてくださいました。

民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。（詩篇　62・8）

私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。（2コリント　1・3～4）

翌日の日曜礼拝で、生まれて初めて、イエス様の十字架が私に強く迫ってきました。人の生死をご支配なさっている神様は完全な方なのに主を恐れず、「私のせいだ」と言う資格すらない者であること、主に頼らないで自分の力で仕事をやり続けてきたこと、愛をもって人を助け看護する力など初めからなかったこと、そうしたことを次々に示され、心からの悔い改めへと導かれました。

まったく無力で役に立たない者だと気づいて初めて、こんな私のためにイエス様が十字架に架かって死んで罪を洗い流し、赦してくださった、と覚えることができました。私はイエス様から責められるのではと恐れていましたが、その時の礼拝や福音集会で語られたみことばの一つひとつは、慰めを受ける

ものばかりで、イエス様が力強く語ってくださった、と思いました。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。

（1ペテロ　3・18）

すべての生き物のいのちと、すべての人間の息とは、その御手のうちにある。（ヨブ　12・10）

その後、人生の最期のときにイエス様の救いがあったら、とホスピスへの思いが強くなり、病院を移って癌末期の患者さん専門のホスピス病棟で約一年半勤めました。相変わらず主を証しできないこの者の心に、救いを知らない方々へのとりなしの祈りをしなさいと主がおっしゃられ、少しずつではありましたが、患者さんやご家族の救いを祈るようになりました。

しかし、ホスピスは理想とは違っていました。死を目の前にして準備期間があると、人はイエス様を求めるようになり、喜びに満たされた最期になるのではないかと期待していましたが、多くの方はむしろ避けられない死を嘆き、あきらめ、空しく悲しい気持ちのまま亡くなっていかれました。患者さんは癌に蝕まれてボロボロになる動かない体や痛みに耐えきれなくなり、すでに治療はないので麻薬や睡眠剤を使ってコントロールしますが、理性もなくなりどんどんわがままになっていきます。死の恐怖から精神的に追い込まれていく方も多くおられました。

死の先にある天国が希望とならなければ何の望みも喜びもない、とはっきり気づかされました。祈りが本当に必要だと感じ、自分なりに祈ってはいましたが、貧しく足りないもので、なかなか患者さんは

救いに導かれませんでした。

唯一、私の弱さのゆえに主が働かれた出来事がありました。刑務所を出入りし家族からも見放された癌末期の六十代の男性患者さんで、寡黙な人で自分のことをほとんど話さず、痛みにも一人で耐えるような訴えの少ない方がおりました

十二月のある時、すでに寝たきりとなって何も口にできなくなっていたこの方から珍しくナースコールで呼ばれました。毎晩寝つけず睡眠導入剤を使用していたので、その準備をしながら「クリスマスですね」と世間話のつもりで話しかけると、「クリスマスって何?」と聞かれました。突然の質問に戸惑いましたが、「イエス・キリストが誕生された日ですよ。私たちのために生まれてくださったんですよ」と答えました。黙って聞いていたこの方（飯塚さんと言います）は、急に「自分には二十歳になる娘がいたけどもう随分長いこと会っていない。プレゼントを贈ったけど何の返事もない。もう一生会えない」といったことを泣きながら話し出され、自分の人生を悔やまれました。

私はびっくりして、とっさに「イエス様、勇気がないけど祈らせてください」と心の中で叫び、「イエス様は飯塚さんを愛してくださっていますよ」と必死で伝えました。私は口下手なのでうまく伝えられず、話しながら自分も泣き出してしまい、とにかく祈ろうと思って「祈ってもいいですか?」と聞くと頷かれました。そして、内容は正確には覚えていませんが、いつもベック兄がされるように「イエス様、飯塚さんの罪のために死んでくださり、ありがとうございます。今までごめんなさい。娘さんのこともすべて含めよろしくお願いします」というようなことを祈ると、飯塚さんは何度もあいづちを打ち、へりくだって「ありがたい、ありがたい」とおっしゃられ、最後に大きな声でアーメンと言いました。二

人とも涙でぐしゃぐしゃで顔を見合わせて思わず笑いました。ちょうど夕食時で、普段は絶えずナースコールの鳴る忙しい時間帯なのに、その時はなんの邪魔も入らず、まるで時間が止まっているようで、本当に平安な祈りの時でした。

その夜、飯塚さんはぐっすり休まれ、翌朝来た担当看護師が「今日の飯塚さん、なんだかスッキリしてるね。何かあったの?」と言われるほどで、本当に主はすごいなと思いました。その後は共に祈ることもなく三日後に召されましたが、はっきりとした救いを見せていただき、天国へ行かれた確信が私の内に与えられ感謝でした。不信仰な私の祈りをも主は聞いてくださいました。

それからは、たとえ目に見えるかたちで救いが起こされなくとも、最期の時にイエス様にごめんなさいを言えるように、そこに希望をおいて祈り続けたいと思いました。

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

(ルカ　23・42〜43)

その後、一時看護師の仕事から離れていましたが、再び復帰し、今は近くの透析専門クリニックで働いています。

できない自分の姿や、自分には愛がないことをいつも見せられ、自分は看護師に向いていないなぁと思う毎日です。私の存在は、時に患者さんを不愉快にし、イライラさせてしまい、またそのことで本当に落ち込みます。それでいて自分のことは棚に上げ自分の義を振りかざし、周りの職員に対して腹を立て、さばいたりもしてしまいます。どうしようもない者ですが、ただ、イエス様を見上げた時に、そのような自分の姿に光があてられ、気づかせていただき感謝です。

今与えられている職場でもイエス様の救いがおこされるよう祈っています。仕事中でも「イエス様、イエス様」と心の中で言うようにしています。そうでないとすぐ主を忘れてしまうからです。自分の力ではなく主の力が働いていると感じられることは大きな恵みです。現実は厳しいし苦しいけれど、この職場で何か主のご計画があるのだと期待したいです。

私はつい、現状から逃げたいがために、早く天国へ行きたいと思ってしまいます。天の御国は、悲しみ・苦しみもなく、主が涙をぬぐいとってくださる、何の悩みもない喜びにあふれた場所だと思うと、希望がいっぱいで、早く入れていただきたいと待ち遠しくなります。イエス様が再び迎えに来てくださるお約束を感謝しています。それまでは、主のご用のため、豊かに用いていただけますように。また、あらゆる肉の欲をふりきって歩み続けられるよう、祈るばかりです。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

(2コリント　4・7)

見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。(黙示録　22・7)

黒田麻美子
一九七六年、埼玉県浦和市生まれ。
新座中、埼玉県立朝霞高校、聖母女子短期大学卒。
慈恵医大第三病院、救世軍ブース記念病院、株式会社アスクレップを経て、現在、高円寺すずきクリニック勤務。

わたしの目には、あなたは高価で尊い

渡辺 浩美



私は昭和四十三年三月に父茂光、母文子の長女として生まれました。明るい両親のもとで、弟・妹と共に、特に大きな病気・困難もなく育ちました。幼いころから高校生になるくらいまで、人の目を見て話すことが苦手でした。なぜか人の目が怖くて、たいてい話をしているうちに目線がそれてしまいました。

小学生のころから外見上の悩み、劣等感がありました。小学生にしては体格がよく、太っていて、鼻は低く、またメガネを五年生くらいからかけ始め、特に自分の横顔は嫌いでした。中学生のころには若白髪がたくさん出てきて、大きな悩みとなりました。ますます私は、人が私のことを見てどう思うかを気にするようになりました。友人は小学校・中学校ともにいましたが、お互いに親友と言い合えるような友人はいないような気がして、寂しい気持ちが少しありました。もちろん、学校生活では楽しい時間もいろいろと過ごしましたが、何か満たされないものがありました。

高校は都立竹早高校に入学し、私はバスケットボール部に入部しました。運動が激しいのでメガネをコンタクトレンズに変え、髪形もショートカットにし、知らず知らずに外見が変わっていきました。一番の悩みであった若白髪も、あまり目立たなくなりました。楽しい高校生活でしたが、でも心のどこかでやはり何か満たされないものがあり、それは何が原因なのか、何によって満たされるのかもわからず、過ごしていました。

進学は短大を志望し、何校も受験しましたが次から次へと不合格になりました。すべて不合格になり、たくさん泣いた後、そろそろ専門学校を選ばなくては・・・と考えていたころに不合格だった恵泉女学園短大から電話が入り「渡辺さんは補欠でしたが、繰り上がったので合格になりました。入学を希望されますか?」と聞かれました。恵泉は最後に受験し

た短大で、補欠のリストに自分が入っていたことを見落としていたようです。このような経緯で、私は恵泉女学園短期大学に入学しました。入学と同時に、教科書と一緒に聖書も購入しなければならず、私は初めて、聖書を手にし、みことばに出会いました。短大ではよく、マタイの福音書が引用されていました。特に、次のみことばは明快で、私の心に深く響きました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

（マタイ　7・7〜8）

短大の聖書のメッセージは、先生方が交代でされていました。いつのまにか毎日の三〇分の礼拝の時間は私にとって楽しみとなっていました。礼拝は自由参加でしたので、ほとんどの学生は食堂でおしゃべりを楽しんでいましたが、私は同じクラスで仲よくなった若月美穂さんという友人と一緒に礼拝に参加していました。美穂さんは立川の教会に集っているクリスチャンでした。彼女は時々、先生のメッセージの前後にお祈りをする当番をしていました。「愛する天のお父様、尊いお名前を賛美いたします」といつも祈りはじめ、毎回本当に素直にお祈りをしていました。そのお祈りを聞いていて、「美穂には、肉親の父親だけでなく、天にもお父様がいるのかぁ、いいなぁ、うらやましいなぁ」と思っていました。

そんなとき、短大一年の秋に、野口香さん（今は結婚されて嶋津香さん）がアメリカでの一年留学を終え、私たちのクラスに転入してきました。香さんが同じ信仰を持っているクリスチャンであることを知り、行動を共にするお友達となりました。

美穂さんも香さんも歌声がとてもきれいで、私は礼拝の時間に二人の歌声を聞きながらいっしょに賛美歌を歌うのがとても好きでした。時々、短大の食堂で、美穂さんと香さんと私はおしゃべりをしていましたが、信仰のことやイエス様の話になると、私は二人に「天のお父様と呼んでいる神様とイエス様は違うの？」、「どう違うの？」などと普段思っている疑問をぶつけたりしていました。二人は私にいろいろと説明してくれましたが、頭では理解できませんでした。でも、二人の説明に「ふーん、そうなんだー」と素直にうなづく心が与えられていました。

このころから、今思うと不思議で、少し恥ずかしいのですが、「私、イエス様のファンなの」と友人たちに言うようになっていました。おそらく、短大で聖書のみことばを読んで、「こんなに、こういうことをはっきり言えるようなイエス様はすごい」と思っていたからだと思います。でも、罪のことは全然わかりませんでした。

そんなころ、短大の行事で、ミニバイブルキャンプが伊豆であり、美穂さん香さんと一緒にそのキャンプに参加しました。私はそのキャンプ中、先生に「罪がわかりません。聖書でいう罪とは何ですか？」と聞いたことがありました。英文科でしたので、入学してまもなく、英語で罪は二種類あることを知りました。

盗みや殺人など、法律にそむいた犯罪は「Guilt」や「Crime」、これは明らかに罪だとわかるのですが、もう一つの罪という単語、「Sin」の意味がわからなかったのでこの時に聞いてみたのだと思います。先生は、「罪とは、神様から離れていることですよ」とていねいに教えてくださいました。でもあまり理解はできず、ただ、先生がそう答えてくださったことだけが記憶に残りました。

翌年のゴールデン・ウィークに、私は香さんに誘

われてキリスト集会の軽井沢キャンプに初めて参加しました。福音集会で語られた聖書のメッセージは難しくてわかりませんでした。でも短大にはなかった「証し」というものを初めて聞き、皆さんがご自分のことを正直に話されていて、証しはいいな、と思いました。確か、このキャンプ中だったと思いますが、昼間の集いで、後に癌で召された笹川兄が証しをしてくださいました。この世でのいのちがあとわずかという時に、点滴を打ちながらの証しでした。死に直面しているのに、体はあんなに痩せ細っているのに、点滴を打ってまでも軽井沢に来てイエス様のことを紹介しているのが不思議でした。なぜなら、そのころの私はだいぶ痩せていて、それがとても嫌だったのですが、当時三十五歳くらいの笹川兄は私よりもずっとやせ細っているのに、病気のことも、やせ細っていることもそんなに悲しんでいない様子だったのです。

このときのことは、強烈な印象というよりは、静かな、いつまでも残る印象として残っています。このころから、月に一、二回、吉祥寺集会の礼拝に集うようになりました。しばらく行かないと心は飢え渇いて集会に行きたくなりました。吉祥寺という場所も当時の私にとっては、いろいろなお店があり魅力的な場所でした。またある時、次のみことばにも出会い、夜寝る前にお祈りするようになっていきました。

あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

（マタイ　6・6）

短大二年の夏、就職活動が本格的に始まる約一カ月前に、私は突然みぞおちが痛くなりました。すぐに病院へ行き検査を受けた結果、急性肝炎と言われました。とてもショックでした。お医者さんには就職活動の制限をされ、「夏休みは家でゆっくり療養しなさい。たとえ就職が決まっても来年四月から働き続けられるかどうかはわかりませんよ」と言われました。

このころの私はかなり衰弱していました。高三の受験前から体はやせ始め、短大に入ってからはいろいろなアルバイトをして、毎日かなりハードなスケジュールでした。短大が一年生の秋から多摩市に移転したため、片道通学二時間というのも体に負担だったのだと思います。胃下垂になり、食事をするたびに胃がもたれることが多く、食事そのものが苦痛でした。いろいろなものを食べたいのに食べると胃が辛くなるので、お昼にはよくうどんを食べていました。体重は四〇キロを切っていました。私は今まで何をしていたのだろう、何のために無理をしてアルバイトをしていたのだろう。短大に入って、外見をよく見せたいがために洋服がいろいろと欲しくなり、お金欲しさにアルバイトをがんばったあげく、健康を失いました。この時になって初めて、目に見えるいろいろなものが虚しく見えました。お金も、洋服や物、テレビなど、これらのものは自分の内側を満たしてはくれないと思いました。家族も本当に心配してくれました。特に母はとても心配してくれましたが、人の心配には限界があります。今の私の気持ちを理解できる人は一人もいないと思い、家族がそばにいても孤独を感じました。このときに、特に聖書のみことばは私にとって力となり、励ましとなりました。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛

している。　（イザヤ　43・1、4）

やせ細って、外見的には女性として何の魅力もない私をイエス様は「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」とおっしゃってくださっている、私は愛されていることをみことばによって知りました。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。　（詩篇　119・130）

また次のみことばにも支えられました。

それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。もうあなたは泣くことはない。あなたの叫び声に応じて、主は必ずあなたに恵み、それを聞かれるとすぐ、あなたに答えてくださる。あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことばを聞く。（イザヤ　30・18、19、21）

神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

のちにベック兄に、「脱出の道とはね、イエス様のことだよ」と教えていただきました。

またあるとき私は、心の中をテレビ画面のように映されたら、恥ずかしくてどこにも行けなくなってしまうだろうと思いました。なぜなら、そのころの私は、同世代の女性の体型、外見を見るたびに、自分と比較し、うらやむ気持ちとねたみでいっぱいだったからです。短大時代という、一般的にはとても楽しい時期に、やせすぎという経験をしたことは私にとってはおもしろくないことであり、辛い時期でもありましたが、私がイエス様と出会い、心から主の御名を呼び求め、救われるためには、必要なことでした。自分の体調や精神状態がよい時には、なかなか気づかないのですが、ひとたび、自分の体調が悪くなり、余裕のない状態になると、自分の本当の姿を知らされます。自分中心な考え、発言、態度、ねたみ、愛の欠如、思いやりのなさ、自分を正当化すること、ひとのせいにすること、これらはすべて、神様から離れている状態＝「罪」が根本にあるからであることを知りました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

（ローマ　7・15、18〜20）

また、久しぶりに会った中学時代の同級生に「どうしちゃったの、そんなにやせちゃって、気持ち悪いよ、もっと太りなよ」と言われ、ひどく傷ついたことがありましたが、私も、自分の気づかないところで人をこうやって傷つけてきたのかもしれないと思わされました。主は少しずつ、私の内側にある罪を教えてくださいました。

就職活動は、お医者さんには制限されましたが、

真剣にイエス様に具体的にお祈りをし続けて、叔父の紹介で今の会社に決まりました。

急性肝炎も二ヶ月ほどで治りました。短大二年の秋ごろも私は集会へ集っていましたが、私は、もっと聖書に書いてあることを理解しなくてはいけないんじゃないか、もっとイエス様の十字架上の死とよみがえりをよく理解していないといけないんじゃないか、と思っていました。少し、苦しかったと思います。あるとき、福音集会のメッセージを聞いて、わからなくてもいい、理解できなくてもいい、ただ、主イエス様を神様の御子であると信じるだけでいい、と知ることができ、体の中から軽くなったのを覚えています。

救われた時期がいつだったのか、わかりませんが、多分このころだったと思います。当時、日曜礼拝・福音集会の後、ギデオン会という、大学生や若い社会人の方々の集いが吉祥寺キリスト集会の二階で毎週行なわれていました。同世代の兄弟姉妹がたと、持ち寄りの食事を囲んで、兄弟がギターを弾いて皆で一緒に歌を歌ったり、聖書輪読をして一人一人が最近思わされていることを話したり、証しがあったり、救われたばかりの私にとってはとてもよい交流のひとときでした。主のお導きに感謝いたします。

その後、集会のある姉妹のお宅での、同世代の姉妹方とのお祈り会に導かれました。私はそのお祈り会で初めて、姉妹がたが家族、親族、友人・知人の救いを、共に祈っていることを知りました。お祈り会はほぼ毎週行なわれていましたので、前回までに祈り続けられていたお祈りについて、共にお祈りの答えを共有することができ、祈り続けていると動きがあるのだなぁと思わされました。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。（1ヨハネ 5・14〜15）

同じ信仰を持つ主にある兄弟姉妹がたとの交わりも必要に応じて与えられ、助けや励ましになったことも数多くあります。また、深く悲しみ、沈むこむような時には、私のために祈ってくださる兄弟姉妹がたをいつも主は備えてくださいました。これからも主の御前にへりくだって、イエス様の愛を感謝して受け取りつつ、歩み続けることができたら、感謝です。

渡辺浩美
東京都北区立東十条小、王子中学、都立竹早高校、
恵泉女学園短期大学卒、
日産自動車（株）勤務



主の一方的な恵み

松井　智恵（ちえ）



左から2人目、知恵さん

このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。（2サムエル　23・5）

イエス様の存在を体験する

私は、クリスチャンホームに育ちましたので、子どものころから日曜日には教会に行き、イエス様がおられることを疑うことなく過ごしてきました。

しかし、中学に入り、それまで当然と思っていたイエス様の存在が、急に当たり前ではなくなり、「イエス様なんて実はいなくて、聖書に書いてあることが全部ウソだとしたら、それを信じてきた私たちはどうなるんだ。目に見えない神様なんて信じられない」と思うようになりました。誰かがイエス様が本当にいることを証明してくれないと、聖書に書いてあることも何も信じられない、と考えました。

そんなある日、私は同級生とある悪巧みを考えました。その当時通っていた英会話学校に行きたくなかったので、まず友達を私の家に招き、その友達が帰るときに私もいっしょに英会話に行くと言って二人で家を出て、でも実は英会話には行かず、その友達の家に行って、適当な時間に英会話に行ったような顔をして家に帰るというものでした。

いざ英会話に出かける時間になり、計画どおり私は友達と家を出ようとしました。そのとき、当時五歳くらいだった妹が玄関に走ってきて「おねえちゃんどこ行くの？」と聞きました。私は「英会話だよ」と答えました。すると妹はまた「おねえちゃんどこ行くの？」と同じことを聞きました。私はまた「英会話だよ」と答えました。そして靴をはき、家を出ようとしたとき、妹は再び「おねえちゃんどこ行くの？」と聞きました。私はけげんに思いながらも「英会話だよ」と答え、そのまま逃げるように家を出ました。

友達の家に行って、二時間ほど遊んでから家に戻りました。家の前に到着したところで時間を確認し、まったく不自然さのない完璧な時刻に家に到着したことに満足して、「完璧だ。これで私がウソをついて英会話をさぼったことがばれることはありえない」と自信満々で家のドアを開けました。

家に入ると、台所にいた母が私を見て「あれ？お父さんは？」と聞いてきました。私は意味がわからず「なんで？」と聞くと、なんと父が私を英会話学校まで車で迎えに行ったというのです。私は真っ青になりました。当時の私にとって父はとても怖い存在であり、ウソをついたことが一番ばれてほしくない相手でした。頭の中であれこれと考えましたがいい言い訳が見つからず、私はすぐに観念しました。父に怒られる恐怖から、泣いて母にウソをついて英会話をさぼったことを白状しました。

泣きながら謝る私に、母は「お父さんとお母さんはだませても、イエス様はすべてご存じでしょ？」と言いました。そのことばを聞いて、私はハッとしました。出かける前に、妹に三回も「どこに行くの？」と聞かれたことを思い出したからです。三回聞かれて、私は三回ウソの答えをしました。いくら妹が小さかったとはいえ、連続して三回同じことを聞くということは、ふだんはありませんでした。また、父が急に私を迎えに行くということもそれまで一度もありませんでした。それらのことは、私のウソを明らかにするためにイエス様がなされたことだと感じました。「イエス様は本当におられる。そして私のことを見ておられる」と認めざるを得ませんでした。

このことは、当時の私にとっては、イエス様がおられることを認めるには十分すぎるほどの体験でした。十三歳の私に最善の方法で主が語ってくださったのだと思います。

それからは、イエス様の存在を疑うということもなく、中学、高校時代を過ごしました。高校三年生のときにこの集会に移り、大学に入って一人暮らしを始めてからも継続して日曜礼拝や家庭集会に参加していました。

イエス様はその時々の私に最善の方法でさまざまなことを語ってくださっています。

ロンドン時代1―湖水地方への旅行

私は、二〇〇五年十二月から二〇〇九年四月までの三年半の間、会社からイギリスに派遣されてロンドンで働きました。当初は二年間の予定でしたが、私の帰国予定まぎわに、ベテランの女性マネージャーが会社を辞めることとなり、新しいマネージャーが日本から来て新体制が立ち上がるまでの間、私がそのマネージャー業務の穴埋めをすることになりました。その予定外の一年半は私のこれまでの人生の中でも最も苦しい時となりました。

マネージャー職（いわゆる、課長としてのお仕事）を、一時的とはいえまったく経験不足の私が実施しなければいけませんでしたので、仕事の引き継ぎが始まると、次から次へと現われる難しい仕事を前に、私はだんだん精神的に追い詰められていきました。

「助けてください。私にはできません、おゆだねしますからよろしくお願いします」と何度主に祈ったかわかりません。一日一日は何とかこなせても、心にはまったく平安がなく、ただ仕事の引き継ぎの期限だけが近づいてきました。そして、二か月が過ぎた頃、プレッシャーと焦りと混乱の中で胃をこわし、ほとんど食事が取れない状況になりました。

そのような私を心配して、母が日本から来てくれることになり、それを機に私は気分転換も兼ねた母との旅行をすることにしました。行き先はイギリスの人気観光地である湖水地方で、ロンドンからは電

車で五時間ほどの旅行でした。ただその時期はちょうどイギリスの連休と重なり、電車の予約がなかなかとれませんでした。それでも何とかインターネットで予約をとり、自宅にチケットを配送する手続きをとりましたので、私は一安心していました。

ところが、そのチケットが配送された際、不在という理由でチケットは業者に返送され、せっかく取った予約もすべてキャンセルとなりました。いろいろ電話をして交渉しましたが、予約を復活させることはできず、あらゆる必死の努力もむなしく、五時間の電車旅行の座席を確保できないまま、私と母は旅に出ることになりました。

もともと予約を取ることがむずかしい時期でしたので、旅行中ずっと座れないで移動する覚悟をするしかなかったのですが、わざわざ日本から来てくれた母を長時間立たせることが忍びなく、快適な旅行を準備できないことに強いストレスを感じていました。

ところが、当日早起きして駅に行ってみると、電車はガラガラ、座れないどころか車両の中に二組だけある大きなテーブル付きの広いシートを悠々と確保することができました。それは三回乗り換えて移動する五時間の道のりの間、初めから最後までずっとそうでした。あんなに電車の予約チケットが取れないと言われたのに、事前に入手していた情報と目の前に広がる現実とのギャップを、私は理解することができませんでした。

しかしこのとき、私は、自分の悩みやストレスがいかに的外れであったかを認めざるを得ませんでした。主の前には、電車の席を用意することなど、たやすいことなのに、私はまったくイエス様により頼もうとせず、人間的な方法でその問題を解決しようとしていました。そしてそこにたくさんの労力を費やしたあげく、問題は解決できませんでした。主には方法があるのに、私はまったく信頼しないどころ

か、しなくてもいい心配で心を悩ます者でした。そして、この態度は仕事の面でも同じでした。仕事の苦しみの中で、「助けてください。私にはできません、お委ねしますからよろしくお願いします」と繰り返し祈った祈りは、ことばの上だけで、実はまったく主に明け渡したくない、自分の思いを握りしめて私の言うとおりにしてください、と主に祈っているような者でした。私は、人生の王座に自分が君臨し、イエス様にまったく明け渡していないことを、このことを通してはっきりと見せられたのでした。

ロンドン時代2―自分はゼロ

湖水地方への旅行を通し、自分の姿を見せられはしましたが、その喜びは一瞬で、自我の強い私の歩みは相変わらずでした。新しいマネージャーが日本からやってきて、慣れない仕事をする必要はなくなりましたが、新しい上司は非常に厳しい人で、元々精神的に弱っていた私は、毎日怒られているうちに文字どおり限界まで追い詰められていきました。何の仕事をしても、報告のメールを一通送るだけでも、ちゃんとできているか、怒られそうなところはないか、胃がひりひりして心配でたまりませんでした。過剰な心配を繰り返すうち、私の意識はもうろうとしているようなそんな感じになっていきました。

徐々に自分がコントロールできなくなり、「ああ、こんなふうに自分で自分がどうしようもなくなることってあるんだな。本当にまずいかもしれない」と思いました。自分の内側から生まれてくる自信のようなものはかけらもなく、完全に自分はゼロだ、何もないと思うようになりました。足を一歩踏み出すことも怖い、そんな状況でした。当時の私は、朝六時に目が覚め、そこから一時間泣きながら聖書を読

ロンドン時代3―すべてを主に明け渡す

日本への一時帰国を機に、私は少しずつ落ち着きを取り戻していましたが、相変わらず恐怖心は付きまとっていました。しかし、あるときから私の祈りの態度で一つ大きく変えられたことがありました。それは、『結果も含めて主にゆだねる』ということでした。

それまでは私は、どうしても『仕事が守られること』を祈っていました。『仕事が守られる』とはつまり『仕事がうまくいくこと』であり、それは『私の望んだような結果になる』ということでした。ここにきても、私はやっぱり自分の思いを握りしめていたのです。

仕事の結果は、当時の私には『上司の評価』、『周りの反応』という形で表れていました。しかし、あるとき、ある社員に対する評価が二人の人で正反対なのを目にしました。一人の人は「あのスタッフはすばらしい」といい、もう一人の人は「あいつはまったく使えない」と言っているのです。小さな組織の中、同じ人に対する評価がここまで違うのだということを見せられ、私は人間の評価が非常に不確かなものであると気づきました。それは、自分に対する評価も同じであると思いました。結局自分にとって仕事がうまくいったと思っても、あるいは誰かがそう評価してくれても、それは不確かなものであり、そうした不確かなもののために今まで振り回されていたことに気づきました。無意識のうちに頼りにしていた基準のようなものを私は完全に失いました。

それ以来、私の祈りは徐々に結果も含めたすべてを主に明け渡すように変えられ、「今日一日の歩みをすべて主の御手におゆだねします。今日一日の仕事が終わるときに、仕事の結果が私にとって成功だと思えても失敗だと思えても、それは問題ではありません。あなたの御手におゆだねしますから、ただあなたの御心のとおりにしてください」と祈るようになっていました。ある意味で、私は責任を完全に放棄している状態でした。実際私は自分では責任を負うことはできませんでした。しかし、主はすべてにおいて責任を取ってくださいました。

そのように祈りが変えられてから、不思議なほどにすべては整えられていきました。どうしていいかわからず途方に暮れていた仕事が、誰も他にやる人はいないはずなのに、いつの間にか終わっていたり、仕事自体がなくなっていたり、そんなことが何度もありました。主は具体的に、何度も何度もみわざをなしてくださいました。

ロンドン時代4―変えられた上司

そのような中、私は一泊二日の予定でドイツキャんで祈り、七時ごろになってなんとか会社に行く勇気をいただくというような感じでした。

しかし、そのような中で主は不思議なことをされました。三年間のロンドン勤務の中で一度もなかった日本出張が、急に与えられたのです。出張そのものは二泊三日でしたが、以前から胃をこわしていた私には、健康診断も兼ねるという理由で日本での一週間の休暇が付くことになりました。通常、会社のルールでは、出張に休暇をくっつけることは許されていないのですが、特別な計らいでそれが許されることになりました。自分でも限界を感じながら身動きが取れなくなっていた私には、この日本出張が主から来ていることがはっきりわかりました。苦しみながらも、主が背後におられることを覚えました。この出張がなければ私はどうなっていたかわからない、本当にギリギリの、そして最善のタイミングでの主の助けでした。

ンプに参加しました。初日の土曜日はたくさんの交わりが与えられ、ただ喜んでいたのですが、日曜日の朝になると急に得体の知れない恐怖心が襲ってきました。集会が終わったらロンドンに帰らなければいけない、私の最大の恐怖の対象であった上司と顔を合わせなければいけない、そうしたことを思うと急にどこかに逃げだしたい思いでいっぱいになりました。

そんな状態で参加した日曜日の福音集会で、メッセージをしてくださったシュベスターは、まず最初に詩篇27編のみことばを読まれました。

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。待ち望め。主を。雄々しくあれ。心を強くせよ。待ち望め。主を。（詩篇　27・1、3、14）

このみことばは、私の心に突き刺さりました。主は私のすべてをご存知だと知り、涙がとまりませんでした。そして、慰めと不思議な解放をいただき、私はロンドンに戻りました。ロンドンに戻った私に、主は最大の不思議なみわざを用意しておられました。

あんなにも怖かった上司が、まるで別人になったかのように、態度が柔らかくなり、以前のようなピリピリとした態度がまったくなくなっていたのです。ほんのしばらくの間に一体なにが起こったのかというくらいの変化でした。そして私は、主は人さえも変えられる力があることを体験しました。それは、人間の力ではまったくできない、完全な主の奇跡でした。

この体験を与えられてから、私は主の喜びの中におかれるようになりました。すべてが主の恵みであると思わされ、感謝に変えられました。予定外に延びたロンドンでのおまけの一年半は、このことを知るためであったと思います。これらのことは、すべては主が一方的に与えてくださったことです。私は主の前にただみじめなものでした。でもそのような私に主は一方的に恵みを備えてくださいました。

しかし、確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた。ほむべきかな。神。神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった。

（詩篇　66・19〜20）

松井　智恵
一九七六年福岡県生まれ。香住ヶ丘小、陽南中、宇都宮女子高、群馬大学、九州大学大学院修士課程卒、IT会社勤務。





夫の司さんと

見よ！主のなさること

増田 喜子（よしこ）

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。
主のあわれみは尽きないからだ。（哀歌 3・22）

私と、夫の司（つかさ）兄弟が、主のあわれみにより救いへと導いていただいてから、早いもので間もなく十年になろうとしております。

二〇一〇年十二月、暮れも押し詰まった日、私は長年悩まされてきたきつい頭痛から軽い吐き気を覚えて過ごしていました。外出ができないので、引越しの後、まだ残っていたいくつかのダンボール箱のうち、ひとつだけでも片づけて静かに過ごそうかと思っていました。ところが、そのダンボール箱の中から、十年ほど前、イエス様と出会う直前に自分が走り書きした手帳のメモを見つけ出しました。当時、私たち夫婦の結婚生活は破綻していました。離婚を考えていた私は、裁判で自分が有利になるようにと、夫の言動を書き留めていました。当時の記憶がよみがえり、私は重く、苦々しい気持ちになってしまいました。

そして、その日の夜、夫が帰ってきて、寝る前のひととき、祈りの時間を持ったのですが、私の頭痛がひどかったことを知った夫は、こう祈ったのです。「イエス様、今日姉妹は頭痛がひどかったようで、かわいそうです。できれば自分が代わってあげたい」と。

涙が出ました。昼間見た、自分が書いたメモを思うと、同じ人間とは思えないような優しい言葉でした。

私たちは、主が建て直してくださった夫婦なのです。それは自分たちでなし得ることではありませんでした。

私は夫と結婚する前に、子供を置いて離婚するという、大きな罪を犯しました。誰かに、このどうしようもない罪を赦してほしい。そうでなければ生きていけない、とずっと思っていました。でも、誰に赦してもらえばよいのか、わからなかったのです。

その苦しみの一方で、現実的に私は再婚し、夫の暴言と暴力に苦しみました。そのころに書いたのが、ダンボール箱の中から見つかった手帳のメモだったのです。

ここから救いへと至るイエス様のストーリーは、まっすぐに進んでいきました。それは、私が元同僚のクリスチャンの方とお話しがしたいと思ったことから始まりました。私は、ただ思っただけでした。あとは、イエス様がすべて導いてくださいました。その方から電話がかかってきました。そして、その方は集会の方ではないのに、私にキリスト集会を紹介してくださったのです。

まず、私が、初めて行った上福岡家庭集会で救われ、間もなく夫が高校生のころから主治医であった奥淳治兄弟と御代田の福音センターでバッタリ出会い、そのことを通し、あっという間に救われました。二〇〇一年の秋のことでした。

救われたころ、夫が「日々の歌」の１０４番（お気に入りです）を鼻歌で歌っているのを聞いて、私は耳を疑いました。かつて、罵声が飛びかった家に、賛美の歌なんて考えられないことでした。

私の方も、夫への怒り憎しみが喜びにとって代わり、その喜びがあふれ止まらなくなっていました。そして、自分の背負いこんでいた重荷がどこかへ飛んでいったように軽くなったのを感じました。本当に不思議でした。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

（１ペテロ　１・８～９）

こうして、私は自分の苦しみの解決がイエス・キリストにしかないということを知るにいたったのです。

私は、八年ほど前、仕事で身体を酷使した結果、仕事を続けられなくなり、退職しました。当初は仕事を辞めれば元気になり、集会にもたくさん集える、と喜んでいましたが、体調はどんどん悪くなっていきました。頭痛、眼の痛み、睡眠障害（私の場合、不眠の反対で眠り続けてしまうというものでした）、足は鉛のようでした。病院でいろいろ調べたがわからず、最後にうつ病というところに落ち着きました。気がつくと痛いところだらけになっていました。この状態は、決して自分から喜んでなりたいものではありませんでした。けれども、このことも主のみこころであり、その背後に主のご計画があることを私は知るようになったのです。

それは、私の大学時代の親友の救いへとつながっていきました。彼女が私とほとんど時を同じくしてうつ病になってしまったことを知ったのは、今から五年ほど前のことでした。彼女は横浜、私は川越と離れていますので、電話で慰めあうようになりました。その電話は相当の長電話で、一度かけると二時間半から三時間くらいは話したと思います。その中で、私は自分の信仰のことやイエス様の話をするようになりました。そして、一進一退の病状に悩んでいた彼女がある日、こう言ったのです。「ヨッコ（私のニックネームです）は、信仰があるから大丈夫なのね」。私はびっくりしました。自分がイエス様に守られていることを、未信者の彼女の言葉で知りました。まったく気づいていない、にぶい者でした。

それから彼女はイエス様を知りたい、信じたいと願うようになり、茅ケ崎の家庭集会にも導かれ、三年ほど前に紆余曲折があった後、二年前の夏、イエス様のみ救いにあずかる者となったのです。

主は、みことばをもって、彼女にご自身をあらわ

してくださいました。

二年前の夏のある日、彼女からいきなり、「私は救われた！洗礼を受けたい！！」という、びっくりマーク付きのメールをもらい、こちらもびっくりして電話をかけました。ひとしきり、救いを喜び、「おめでとう」を言って電話を切りましたが、私は、「大丈夫かな？ホントかな？」とちょっと思ってしまったのです。でも、その日の夜、彼女から興奮して電話がかかってきました。私が彼女に送ったたくさんのみことばカードのうち、意味がわからないものが一枚あって、それがお料理の本に挿んであったそうですが、そのみことばカードが、救われたその夜、本を開いた拍子にひらりと落ちて、拾ってみると、そこにはこう書かれていた、と言うのです。

あなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。

（ルカ　10・20）

それまで意味がわからなかったみことばを、イエス様は最後に取っておかれ、彼女にお示しになりました。こうして、兄弟姉妹の祈りに支えられる中で、彼女は救われました。主にある平安をいただきました。彼女は、「私は目に見えるものしか信じないのに…」と言って泣いていました。私も泣きました。このことを聞いた夫も涙を流し、私たち夫婦は、神を賛美し感謝の祈りを捧げました。私は体調すぐれぬ中にあって、友の救いという素晴らしいプレゼントを主からいただきました。

このことは、私にとってもう一つの重要な意味を持っていました。……私は、高校生のときに一人の親友を失いました。彼女が心の問題で苦しみ悩んだとき、私は彼女の苦しみを理解することができず、またかける言葉も知らず、何の助けにもなれませんでした。それどころか足を引っ張ってしまったかもしれない、との思いが今までずっと私の心にトゲのように刺さったままになっていました。私は、八年ほど前の「証し」で、このことに触れたのです。すると、ある未信者の方が私の証しを聞いて、「そのお友達はそのあとどうなったのでしょうか」とおっしゃったと言うのです。天国に行けたのでしょうか？

私自身、この証しは中途半端で答えがないと思っていました。「私は、彼女に会って謝らなければなりません。人生のいろんな場面で、いろんな話がしたかったのに…」そう祈ったのは、さきほどお話しした友人が救われてからのことでした。そうして、ハッと気づいたのです。もうお答えをいただいていることに。彼女の救いは、それに対するイエス様のお答えでもあったのです。その高校時代の親友が亡くなったすぐ後に、私が大学に入学して最初に出会った大切な友人、それがその友人だったのです。その友人がうつ病になってしまったことを知ったとき、私は「大変なことになってしまった」と思いました。高校時代の友人のことがまっ先に頭に浮かび、大急ぎで電話をしたのです。

でも、今度は前とは違いました。今度はイエス様がいてくださり、みことばという強い味方がありました。そして彼女は、救われました。

私は、その高校時代の親友と、天国で会えるという確信を、主からいただきました。イエス様が最初から係わっていてくださっていた、それ以上に何の説明がいるでしょうか？

今から三十四年前に、すべてを知っておられ、彼女を私のそばに置いてくださったのは、イエス様でした。主のご計画の壮大さを思わずにはいられません。

うつ病という状態を通して、イエス様は更に豊かに恵んでくださいました。

体調が悪く、なるべく動きたくない自分を、努力が足りないのではないか、怠けているのではないか、と責めた時期があり、そのころは、喜びも平安も失っ

ていました。自分は大丈夫だと思っていたのに、私は神ではなく人を見ていたのです。自分の中の律法に縛られてしまってもいました。でも、私のその間違った信仰を、イエス様は静かに直してくださり、そこから解放してくださいました。家にこもりがちな中にも、必要な交わりや祈りの課題を与えてくださいました。イエス様は、放っておかれないお方であることを感じました。

そして、同じようなことが以前にもあったことを思いだしました。九年ほど前、主人と共に洗礼を受けたときのことです。

そのとき、私は、ある姉妹と非常にギクシャクしていました。私は、『嫌われた…』と思ってしまったのです。そのとき、救われて間もない私の中に湧いてきた思いは、こうでした。「こんなふうになるなんて、私は洗礼を受ける資格なんかない」。私はすっかり自信を失ったのです。私は、洗礼式を目前にして泣きたいような気分でした。グズグズしていると、姉妹方に、「まだこんなところにいるの？早く行きなさい。」とせかされて、福音センターの地下へ続く通路を一人トボトボと歩いていると、うしろから声をかけられ、振り向くと、ベックさんでした。私は、ベックさんのお顔を見るなり、「自信がないんです」と言っていました。そのとき、ベックさんが何と答えられたのか、私は覚えていません。心ここにあらずで「どうしよう。どうしよう」と思っていました。そして、洗礼式が始まってしまいました。

ところが、最初の賛美を歌い始めると、私は途方もなく大きな喜びに包まれ、安堵で涙が止まらなくなりました。最後まで泣きっぱなしで、事情を知らない夫は「よくあんなに泣けるよね」とあきれていました。ベックさんは、洗礼式のメッセージの中で「喜子姉妹はね、自信がないと言ってるんです。ありがたい」と言ってくださいました。「資格がないという確信が資格なんです」と。自信がなくてよかったのです。自信がなくてほめられたのは、初めてでした。

この世ではありえないことです。すべては、主が起こされたことでした。そして、主の愛の大きさを知りました。

「たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれむ主は仰せられる。

（イザヤ　54・10）

この洗礼のときのことは、ずっと、ただのエピソードと思っていました。イエス様からの恵みであり証しであると気づくのに、九年もかかってしまいました。これですから、日々恵みをたくさんいただいているのに、きっと愚かな私は、気がついていないのではないかと思います。それほどに、イエス様はよくしてくださいます。

昨年の夏、夫が一度天国に行きかけました。低血糖の発作でした。本人も経験がない急激なもので、救急車の中で意識が戻りました。そのとき、こんな小心者の私が恐れを感じずに、夫の処置にあたれたのも、イエス様が助けてくださったからだと思っています。搬送先の病院で、私の処置がなかったら助からなかった、と言われました。

証しを書き進むうち、日々の歌１６９番の歌詞が浮かび胸に迫ってきました。「見よ！主のなさること。主は生きておられる。思いと時を超え、すべてをよきに成したもう」

増田　喜子
一九五八年東京都北区生まれ
埼玉県立川越女子高等学校卒、上智大学卒

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会　10:00 / 18:30

火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■ しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

モーセの十戒 神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。

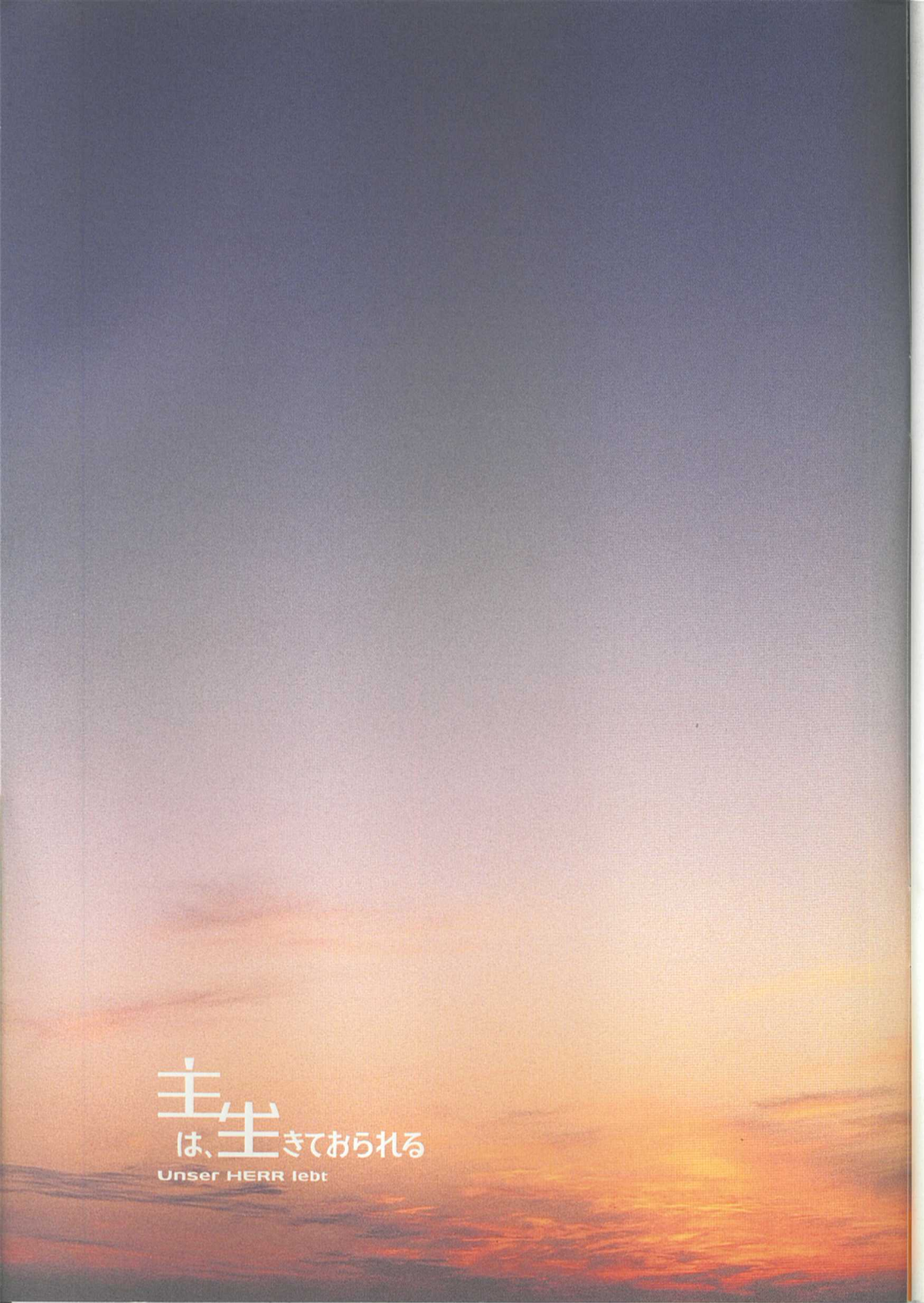
光よあれ －私たちは主のもの



証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt

主は、生きておられる

主は生きておられる　第23号

定価100円（本体95円）　2012年1月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
イラスト	向井則博
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

